みんなの三峰川を次世代に

三峰川みらい会議

目次

はじめに …… 3
１．みらい会議の設立 …… 4
　１）三峰川のあす・みらいを探しませんか …… 4
　　（みらい会議メンバー公募）
　２）みらい会議メンバーの参加動機 …… 7
　３）みらい会議メンバーの熱き思い …… 8
　４）みらい会議の発足 …… 11
２．住民参加のワークショップの運営 …… 13
　１）ワークショップって何？ …… 13
　２）みらい会議メンバーの連帯感創出 …… 16
　３）グループごとのワークショップの運営 …… 24
　４）話し合いでの運営手法 …… 25
　５）みらい会議メンバーの自主活動 …… 28
３．三峰川みらい会議メンバーの意見がまとまるまで …… 30
　１）まず、三峰川のこと知らなきゃね！ …… 30
　２）ここでは、全員からだ動かしてもらいます！ …… 32
　３）どんな意見も受け止めます、貼りつけます！ …… 34
　４）落ちこぼれなんて言わせません！ …… 35
　５）そして同じ土俵にみんなが乗ってきた！ …… 37
　６）同じフルイを揺すってみれば …… 38
　７）みんなでつくりあげた珠玉の言葉！ …… 40
　８）リーダーの活躍は忘れてはなりません！ …… 42
　９）そして１年目は終わり、２年目へとつづく …… 44
４．三峰川みらい会議に参加して …… 44
　１）みらい会議メンバーの感想 …… 44
　２）みらい会議代表者の感想 …… 49
　３）みらい会議事務局の感想 …… 55
５．今後の三峰川みらい会議について …… 62

■三峰川みらい会議・検討委員会・事務局名簿 …… 63

はじめに

かつての日本の川は、その一つ一つが独特の個性を持っていました。その個性の半分は流域の自然環境が作り出したものですが、残りの半分は、人間社会の要因を反映して作り変えられていったものです。川の自然の個性は、川自体が作り出したものであるとともに、地域社会の安全と産業構造を維持するために、人間の手を加え続けるなかで生まれてきたとも言えます。

昭和30年代以後のわが国の治水事業は、急速な都市化と高度成長経済を支えるために水利用の転換が急がれ、流域の土地利用が変化したことも加わって、自然環境や水循環を大きく変化させました。その結果、流域の保水力を低下させて洪水が増大し、水辺空間の減少、通常の河川流量の極端な減少、湧水の枯渇、地下水の過剰な揚水による地盤沈下など、新たに水をめぐる様々な問題を発生させるに至りました。

また、治水・利水に支えられた都市的な暮らしの中で人々は川から遠ざかり、川の脅威も魅力も、川が本来は自然そのものであったこと、川が多様な生命の住みかであることも忘れてしまいました。いま、川や地下水は水質が悪化し、生態系への影響や飲み水に対する安全性も懸念されています。

このような背景のもとに、いま、川づくりが変わろうとしています。現在では治水・利水はもとより、河川水質の改善、生物の生息環境の保全、親水性の向上など、良好な河川環境の形成を目指し、さまざまな事業が展開されています。また、河川整備の際も、河川の多様性に配慮することが求められるようになりました。

三峰川では、1997年の８月に、次世代に誇れる川の未来像を探し出すことを活動の目的として、一般から公募したメンバーによる「三峰川みらい会議」が発足しました。

この会議では、三峰川と天竜川の合流から高遠ダムまでの区間において、過去の災害などを踏まえ、川の安全性を保ちながら、自然豊かな環境をどのように守り育てていくのか、また、地域の生活や文化にも直結するこの川をどのように利用していくのかを研究し、議論の中から合意した考え方を創り上げていきました。また、同年９月には、学識経験者・行政機関・関係団体などによる議論の場

として「三峰川みらい検討委員会」が発足しました。約１年７か月の活動を通してまとめられた「三峰川みらい計画」は、1999年３月９日の三峰川みらい検討委員会で承認され、３月30日には、三峰川みらい会議の新たな組織へ向けて、発展的改組式が行われることになりました。

本冊子は、住民で構成される「三峰川みらい会議」が、三峰川の未来像をどのように合意して創り上げていったのか、その過程をまとめたものです。内容は、４章を除いて「三峰川みらい会議事務局」の視点で表現しています。みらい会議メンバーの見解とニュアンスの異なる場合もあるかと思いますが、その際はご容赦ください。

同会議は２か年続きますが、本冊子では１年目の活動を中心に振り返っています。１年間の試行錯誤の記録ともいえるこの内容が、「三峰川みらい計画」を実現していくプロセスで再び参考になれば、この上ない喜びです。

新たな組織のもとで、「三峰川みらい計画」の実現が計られることを祈念するとともに、「三峰川みらい会議」および「三峰川みらい検討委員会」に参加いただいた皆様のご尽力に感謝致します。

１．三峰川みらい会議の設立

「三峰川みらい会議」は、幅広い地域の皆さんとともに、三峰川のみらいについて研究・議論することにより、次世代に誇れる三峰川のみらい像を探し出すことを目的として設立されました。

会議のメンバーは、一般公募による地域の皆さんで構成されており、ボランティア参加にも拘わらず、沿川地域の皆さんはもとより、県内外の地域から61名の方々が参加しています。職業別に見ると、議員・農業者・会社員・主婦など様々な層の方々がいます。

「三峰川みらい会議」は、将来像計画（案）を検討・作成し、「三峰川みらい検討委員会」に提案していく組織として位置づけられています。

１）三峰川のあす・みらいを探しませんか（三峰川みらい会議メンバー公募）

三峰川みらい会議のメンバーを募集するにあたっては、広く伊那谷全域の意見

を聞くことに留意し、応募資格を流域市町村（伊那市・高遠町・長谷村）に限定しませんでした。以下のような内容の募集要項を作成し、新聞とともに配布し、また市町村役場の窓口にも置きました。参加を希望される方には、官製はがきに応募理由と三峰川の将来像に望むことを記述して申し込んでいただきました。なお、原則として応募者全員をメンバーとすることも明記しました。

【三峰川のあす・みらいを探しませんか】

～三峰川の将来像計画メンバーの募集～

○三峰川の将来像計画ってなに？

三峰川は、南アルプスを源流とする自然豊かな川です。また、下流の方へ行きますと川幅が広く、木や植物が生い茂り、鳥や魚や昆虫などの生物が棲みやすい空間となっています。三峰川の将来像計画は、天竜川合流点から高遠ダムまでの、これら自然豊かな環境をどのように守り育てていくのか、また、地域の皆さんの憩いのスペースとしてどのように利用していくのかを、地域の皆さんと手と手をとりながら、次世代に誇れる三峰川のみらい図を考えていくものです。

○どうやって計画を決めるの？

計画を決めるまでの流れとしましては、二つの会議を中心に進めていきます。一つは、今回募集する地域の皆さんを核とした「三峰川みらい会議」で、この中でみらい計画の案を考えていきます。もう一つは、三峰川みらい会議の代表者、生物や環境の専門家の方々、行政機関・関係団体の方々などによる「三峰川みらい検討委員会」で、計画案をより具体的に検討していきます。また、計画案を地域の皆さんにお知らせし、ご意見やご提案をいただきながら検討していきます。

○メンバーになって何をするの？

今回募集するメンバーは、「三峰川みらい会議」の一員として、約 2 年間（年間 2 ～ 3 回程度開催）にわたり、三峰川みらい計画の検討作業を行います。

○メンバーには誰がなれるの？

今回の募集につきましては、以下の条件に対象となる方で、ボランティアで参加していただきます。

・三峰川に興味のある方
・約２年間にわたり開催する「三峰川みらい会議」に継続して参加していただける方
・18歳以上の方

○応募方法・メンバーの選定

官製はがきに、お名前（性別も）、ご住所、電話番号、年齢、ご職業、応募された理由と三峰川の将来像に望むこと（100字程度）を明記して、７月末日までに下記までお送りください。

メンバーは原則として応募のあった方全員とします。選定の通知は、第１回三峰川みらい会議の開催通知にかえさせていただきます。

なお、応募者多数の場合、第２回みらい会議以降は、はがきに記載された内容等により選出させていただく場合もあります。

○お問い合わせ及び応募先

建設省天竜川上流工事事務所　調査課　調査係

上記の募集案内に対して、55名の応募がありました。流域市町村のみならず、長野市・松本市・東京都からも応募があり、三峰川みらい会議への興味の程がうかがわれました。これに加えて、流域の状況を端的に認識している方を、流域の各市町村から２名ずつ推薦していただきメンバーとしました。この結果、三峰川みらい会議のメンバーは総勢で61名となりました。

メンバーを性別で見ますと、男性が93.4％、女性が6.6％です。年齢別に見ますと、20代が3.3％、30代が19.7％、40代が26.2％、50代が18.0％、60代が18.0％、不明が14.8％です。

2）三峰川みらい会議メンバーの参加動機

応募の際にはがきに記載された「応募理由」から、三峰川みらい会議メンバーの主な参加動機を以下に紹介します。

○三峰川と至近距離に暮らす地元住民としては、このエリアがいたずらに俗化されず、健全に整備されていくことは、大変興味のある問題である。地域における自然がもたらした石と緑の天然公園として、人々の暮らしの中にいかに溶け込むべきかを考えてみたい。

○緑の少年団の子供たちと行動を共にしていて、水と緑とふるさとを通じて、環境問題を考えていきたいと思いました。

○三峰川の辺りで育ち、この川の楽しさや恐ろしさの中で育ちました。将来、この川を水源域のダムの完成により、市民生活の場として活用できたらと思います。

○三峰川は、生まれたときから一緒に生活してきた川であり、その安全性と活用は大きな関心事である。

○自然環境と人と文化との関わりに興味がある。

○幼少の頃から三峰川は打ってつけの遊び場でした。それだけに、懐かしい思い出の宝庫です。しかし、ここ30数年間に河原は雑木林に変貌し、昔の姿今いずこの感深しです。

○住人と自然とがうまく共存するまちづくりに参加したい。

○堤防沿いのジョギング道路を活用し、自然観察路としても整備したいと考えています。観察ポイントごとに自然解説版を設置し、四季折々の解説を行えればと考えます。

○三峰川と伊那富士は私の揺籃の地であり、我が家から見える眺望と三峰川のせせらぎは、心の故郷として印象深いものがあります。環境保全について協力できることがあれば、協力したいと思います。

○三峰川は、高山・原生林・人工林・地質・岩石・水生生物・魚類・植物・治水・灌漑・歴史・風景・生活などのあらゆる事象が凝縮された河川であり、これらを学ぶことによって自然と経済の接点・好ましい姿を模索したい。

○地域の活性化やまちづくりに関して興味を持ち、活動しています。三峰川みら

い会議で、伊那谷の将来像を研究したいと思います。
○環境の保全と保安林との関わりのついて関心があり、三峰川の今後のあり方について一緒に考えていきたい。
○三峰川流域の自然環境の接し方に物足りない思いがあるため。
○子供の頃に見たような清らかな流れの中で、河川公園でなくても、大人も子供も遊べるような三峰川にしたい。
○目先の利益にとらわれず、三峰川の自然の姿を残したい。
○「環境を重視した河川管理」を考えてみたいと思います。
○かつては抵抗なく接した川、今の子供たちが自然と足が向き、色んな体験ができる川にしたい。
○現在の三峰川には、ほとんどと言っていいほど水が流れていません。誠に残念でなりません。ダム湖からの放流を望みます。また、中央・南アルプスの見られるこの地に、サイクリングロードの整備を望みます。三峰川の源流を訪ねることもやりたいです。そして、川を知り守りたいと思います。
○三峰川の近所に住んでおり、自分の研究テーマでも深く関わっているので、親しみがある。
○自然空間を守り育てながら、地域の憩いの場として活用していく、すなわち人間と自然との共栄を考えていくという現実的なテーマに賛同するとともに、私自身も考え勉強してみたい。

3）三峰川みらい会議メンバーの熱き思い

応募の際にはがきに記載された「将来像に望むこと」から、三峰川みらい会議メンバーの主な熱き思いを以下に紹介します。

○子供から老人まで安心して心から楽しめ、一日いても飽きない自然の造形美、歩行者専用の吊り橋も随所に造り、自然を破壊せずに自然を人間のものとする。将来の人々にも伝えていける大テーマパーク、そんな川になって欲しい。
○本当は、自然にできた河川敷を、できることならそっとしておきたい気持ちもありますが、せっかくできた広い土地です。貸していただくという気持ちを忘れずに、子供から年寄りまで皆で素敵な一日が過ごせる場所になったらいいなあと思います。

○第一に安全であること、第二に豊かな生態系を保存すること、第三に広い空間を活用して地域の人が憩いの場として親しむことのできる場として整備することが大切です。この川の安全と浄化を図り、人が親しめる活用を進めることは、他に追随を許さない個性ある地域づくりにつながることであり、英知を結集して積極的に取り組むことを希望します。

○自然を我々人間が考えるとき、人間のリズムは早く、自然はゆっくり動く。また、年月が経つごとに自然と人間が融合していきたい。日本全体を視野に入れても南アルプスは素晴らしい。歴史的に見て、後悔を残さないようにしたい。

○36災害のような集中豪雨が再来したら、雑木林が災いして河川機能を果たし得ず、大災害にもなりかねないことが危惧される。そこで、まず河川の安全確保を最優先に、河川敷の環境整備を図ることが肝要だと思います。

○私の小さい頃、カジカ、ヨナ、サソリ、マゴタ等いくらでも見ることができましたが、現在はほとんどおりません。今の子供たちも黒く日焼けして、たくましく育って欲しいと願います。三峰川へ遊びに行けば多くの生物を観察できることで、伊那または付近の地域への宣伝になればと思います。

○残念なことは、川なのに水がいつも見えないことです。子供の自然とのふれあいが最も多い場所が、水辺だと思います。気軽に河川敷におりて、木々の中を散策し、水辺にも近づけて行けたら楽しいですね。

○川で子供たちの遊ぶ風景（うろづかみ、魚釣り等)。外から見る川、内から見る川の体験ができる（カヌー等による野鳥観察、川流れ等)。霞堤・聖牛・ふとん等の治水工法を学習する場を作る。

○現在、ナイスロードを中心とした周辺地域の開発が進んでいますが、私達の子孫に対し、三峰川の豊かな自然を残しつつ、地域の憩いの場として活用していきたいと思います。また、市民レベルで大切な自然の管理をしていきたいと考えます。

○自然と共有できる空間として、子供が遊べる場、夕涼みができる場、花見のできる場、両側にアルプスが映えスケッチのできる場など、楽しいところにしていきたい。まずは、子供たちが遊べる場所として、三峰川に水の流れを取り戻したい。

○三峰川は、自然環境が豊かな河川です。しかし、環境の保全とは手を付けないことではありません。治水対策も行わなければ環境が壊される場合もありま

す。安全であり、自然浄化機能を持ち、農業・水産用水としての利用、一般市民の親水利用など、私達の日常生活の中で必要な存在であって欲しいものです。

○この川が、これ以上人工化されることなく、多様な生物が生息する川として、自然観察や自然体験ができるように、なるべく現状のままで残して欲しいと思います。

○水から潤うものをかかげ、風景にしても、魚にしても、河川公園にしても、テーマパークにしても、集まりやすい憩いの場が提案できれば幸いですし、そう望みたいものです。そして、みんなの川として美化に努め、伝統を育んで行けたらと思います。

○自然豊かな三峰川と周辺の良好な景観を活かして、地域の方だけではなく、もっと大勢の方に三峰川を知っていただき、また来たいなと思っていただけるような川づくりができればと思います。

○どんな計画が出来上がるか分かりませんが、皆のものを皆に返して行くんだという気持ちで取り組んでもらいたいと思います。建設省が管理するのではないことに気がついてもらいたいと思います。

○今後もこの自然の状態を維持し、私達は自然観察とやすらぎの場として利用させてもらうのがよいのではないでしょうか。

○21世紀の伊那市民は、人工的な公園、レジャー施設、アウトドアスポーツ等には、うんざりしているはずである。川の水は米づくりの命。河原から吹く風は元気のもと。生い茂る樹木は人以外の生き物の住みか。人が容易に近づけない自然の空間こそ、貴重な存在と考えるべきであろう。はやりの開発方式だけは取るべきではないと考えています。

○今回の河川整備計画においては、美しいまち高遠町のイメージを大切にして、その歴史と自然を生かした多自然河川として整備すれば素晴らしいと思います。

○きれいな岩肌を流れる清流、これが三峰川であると思い育ってきました。しかし、ダム建設により水のない川になってしまいました。通年流水と河川敷地の有効利用を望みたい。

○子供たちが、親も一緒に、自然の中で遊べる三峰川にしたい（環境教育）。伊那市・高遠町・長谷村を結びつける地域の絆にしたい（流域連携）。泳げる三

峰川、飲める三峰川の水づくりにチャレンジしたい（エコ・システム）。

○三峰川には広大な河川敷が残っており、上伊那の景観上からもその活用が重要な地帯です。人と水辺との関係が身近になれば、今後に残す大事な財産となります。自然環境を大切にしながら活用を図ることが重要ではないかと考えております。

○川の自然の豊かさと、水の危険性が、散策することによって体で知ることができるような演出が欲しい。

○河岸段丘がきれいな形で形成されているので、将来に残したい。樹木と流れを活用し、また河岸段丘林を含めた自然観察公園としたい。

○自然空間利用の名のもとに、都会を持ち込むような公園や都市河川にしないこと。維持流量を増やし、堤防は緩傾斜にし、河道の安定を図り、今ある植生を活かしながら、魚取りや川干しができ、遊びながら自然が体験できる川に。

○自然ができる限り破壊されることなく、常に水が流れている三峰川であって欲しいと望みます。

○既に造られている県内の公園を見ると、人間が楽しむことだけを目的として造られているものが多く見られる。三峰川は、野生動物の生息空間を優先して川づくりを考えて欲しい。

4）三峰川みらい会議の発足

第１回目の「三峰川みらい会議」が1997年８月21日に、伊那市役所で開催されました。出席者は、メンバー総勢61名のうち50名で、東京都・長野市・松本市などの遠方の方々も駆けつけてくれました。

会議は、大きく全体会議とグループ別会議に分けて行いました。全体会議では「三峰川みらい会議」の趣旨について、活動原則について、計画策定までの進め方について、三峰川の河川特性と自然特性について事務局より説明しました。ここで、設立趣意書および活動４原則が承認されました。なお、活動原則の原案は５項目ありましたが、会議の中で、メンバーを地域の代表と位置づけることは適当ではないとの議論があり、原案の５つ目の項目が削除されました。

グループ別会議では、「仙丈ケ岳」・「東駒ケ岳」・「塩見岳」の３グループに分かれて、自己紹介と意見発表を行い、各グループの代表者を、それぞれ２名ずつ選出しました。

メンバーの方々の意見としては、「現在の豊かな自然環境にこれ以上手を加えない」、「高遠ダム下流の水量確保」、「子供たちが自然とふれあうことのできる場の確保」、「自然環境の保全も大切だが、まずは治水が第一」などがありました。

【「三峰川みらい会議」設立趣意書】

三峰川は、南アルプスを源流とする自然豊かな川で、周辺地域では、三峰川を中心とした生活の営みがあり、また、そこから様々な文化が生まれ育まれています。

「三峰川みらい会議」では、この自然豊かな三峰川を伊那谷共有の財産と考え、天竜川合流点から高遠ダムまでにおいて、過去の災害などを踏まえ河川の安全度を保ちながら、これら自然豊かな環境をどのように守り育てていくのか、また地域の生活や文化にも直結するこの川をどのように利用していくのかを、地域の皆さんと共に研究・議論することにより、安全で自然豊かな次世代に誇れる三峰川のみらい図を探し出すことを活動の目的とします。

【「三峰川みらい会議」活動 4 原則】

「三峰川みらい会議」では、以下の 4 原則を遵守し活動していきます。

1．それぞれの発言を尊重し、発言に対して否定することはしない。
2．構成員全員が平等の立場にあり、自由な発言を行う。
3．三峰川は伊那谷の共有財産であることを忘れず、私利私欲のための発言は行わない。
4．構成員は、三峰川のあるべき姿を常に研究し、お互いに納得のいくまで議論する。

２．住民参加のワークショップ運営

1）ワークショップって何？

三峰川の将来像を描き、どのように整備・保全・利用していったらよいか――これを住民参加で検討していこうというのが、今回のみらい会議の発端です。

住民参加の方法には様々あります。従来よく行われてきた住民説明会、今回も実施した住民アンケート、そして住民参加イベントの開催や投書はがきの募集等々。しかし、今回私たちが採用した「ワークショップ」という住民参加の方法は、最も直接的に住民がその意志決定のプロセスに関与できる方法であることから、採用したものです。

アンケートと違って参加者同士の相互学習の機会があり、各人が考えを発展させた上で結論に巡りつくことができますし、従来の会議と違って多数決による決定を避け、みんなが納得できる解決策を探っていくこともできます。

また、住民説明会のように行政対住民の関係が大半を占めるのではなく、多様な参加者間のコミュニケーションの機会を提供し、新たな人間関係を培うきっかけともなり得ることも見逃せません。

「ワークショップ」は、他の住民参加手法にくらべて、以上のような特徴がある他、それ自身でも様々な工夫がなされた会議の一種です。それは、誰もが自由に意見を出しやすいように工夫されていたり、グループ全体で創造していく活動と合意の形成に焦点がおかれていたり、そして何よりも形式張っておらず遊びの要素をとり入れているなどです。

今回の三峰川みらい会議のワークショップの実態を踏まえて「ワークショップ」を定義してみると次のように考えられます。

ワークショップとは

① 参加者が相互に学習する機会を設け、その上に立って、多数決によらない質的な議論を深める集まり。

② 誰もが意見を出し易いように工夫してある集まり。

③ グループの創造行為と合意形成に焦点をおいている集まり。

④　形式張っておらず、遊びの要素もある集まり。
⑤　結果として、参加者間の新たな人間関係を培うきっかけとなる集まり。

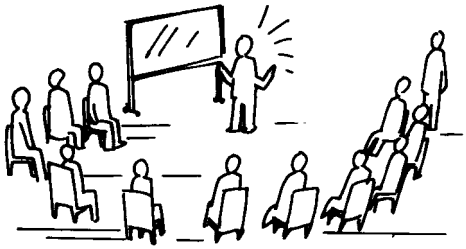
このようなワークショップは、今回のようにみらいへ向けての基本的な考え方にとどまらず、みらいの具体的な活動まで視野に入れた会議の内容からみても、最適な方法だったといえると思います。

そして、平成９年度は、次のような日程でワークショップとしてのみらい会議が行われました。

三峰川みらい会議の開催経緯

	三峰川みらい会議
H．9 7月	メンバー募集 ・新聞報道および市町村役場窓口に募集要項の配布 ・応募動機と三峰川への想いを書いて応募してもらう
8月	平成９年８月21日 第１回　三峰川みらい会議 ・現況の河川特性、自然特性について ・グループ別自己紹介 ・参加者の三峰川に対する想い発表 ・三峰川との関わりについての旗上げ式アンケート ・会議に対する記入式アンケート
9月	平成９年９月30日 第２回　三峰川みらい会議 ・三峰川について勉強したいことの旗上げ式アンケート ・計画地の自然環境情報提供 ・昔、今、未来という観点で環境、治水・利用についての情報マップづくり

10月	
11月	平成９年11月14日、21日 第３回、第４回　三峰川みらい会議 ・環境・治水・利用についてＫＪ法により意見交換 ・基本方針案の検討
12月	
Ｈ．10 １月	平成10年１月30日 第５回　三峰川みらい会議 ・基本方針を踏まえた整備・保全・利用のイメージマップづくり
２月	
３月	平成10年３月２日 第６回　三峰川みらい会議 ・将来像計画案の作成 平成10年３月27日 第７回　三峰川みらい会議 ・今年度活動の総括と来年度活動の要望

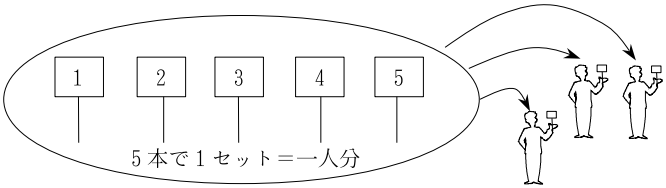


2）みらい会議メンバーの連帯感創出

①　自分を知る、他人を知る

みらい会議メンバーがどんな人なのかをまず互いに知り合うために、全員参加の旗上げ式アンケート、思いを付け加えた自己紹介（ウィッシュポエム紹介)、そして毎回胸に付ける会員証の発行をしました。

ａ．旗上げ式アンケート



１から５までの番号を書いてある小さな旗を全員にもってもらい、私たちが質問する問いに対して１～５の答えの選択肢の中から選んだ番号の旗を上げてもらいました。第１回みらい会議では、顔見知りの人の数、どのくらいの時間をかけて会場まで来たのか、三峰川との日常的接触度合などを聞きましたが、その場で答えの出る結果に対し、みなさん顔を見合わせながらうなずいていました。特に、顔見知りの人が何人いるのかの質問では、出席の50名全員の顔をひと回りながめることになり、「あれ、あんたも来てたの？」という目線が行き交っていました。ゲーム感覚の旗上げ式アンケートで場の雰囲気も和やかになったようです。

b．ウイッシュポエム紹介（自己紹介）

集まったメンバーが三峰川にどのような思いを抱いているのかを、短く表現しながら自己紹介をしてもらいました。I WISH ～ という内容になるため、ウイッシュポエム紹介とも呼ばれます。今回は、20名ずつのグループごとにこれを行い、参加メンバーの顔と思いを一致させていきました。もちろん事務局のメンバーも一個人として自己紹介しました。

下図のようにあらかじめ書き込んだ部分のあるＡ４判の厚紙を用意し、○○○と□の中を埋めてもらいました。これは、自分を他人に紹介するとともに、自分は何を三峰川に望んでいるのだろうかと考える機会、つまり自分自身を知る機会にもなったようです。

○○○○な

三 峰 川　にしたい
　　であってほしい

（ 氏 名 ）　です。

◎各グループごとのメンバーの思い

仙丈ケ岳グループ

氏　　名	三　峰　川　へ　の　お　も　い
鈴　木　　孝	・子供達が川遊びのできる
小田原　光　計	・緑がどこにもある
南　坂　丈　治	・都市のまねした川でない
御子柴　慶　治	・水の飲める
宮　入　賢一郎	・子供から大人まで水と緑の中で遊ぶことのできる
白　鳥　博　文	・自然豊かでふれあいのあるやさしい
白　鳥　　孝	・年中子供達が川で遊ぶ姿の見られる
北　原　　武	・清流の流れる川、子供も大人も遊べる川に
高　島　良　幸	・豊かな自然の中で親も子も遊び学べる、泳げる
若　林　徹　男	・魚と遊べる川・昔のような桜のある川・樹木のある河川敷である
藤　本　　満	・子供が遊べる、大人も遊べる
中　山　俊　幸	・もう少し通水量がある
松　井　君　子	・水害が起きぬ程度の植生、動物などが変化せぬような、人工的でない
下　島　宏　文	・自然のまま、きれいな水がたくさん流れる
二　宮　孝　治	・このまま自然にかえっていく
来　島　幹　勇	・自然豊かで皆の楽しめる川
中　川　　泰	・清流の流れる
大瀬木　恵　一	・なるべく人の手を加えず、豊かな自然をそのままにとどめた

東駒ケ岳グループ

氏　　名	三　峰　川　へ　の　お　も　い
成　田　郁　美	・長期的視野にたった計画に基づく
春　日　良　郎	・自然公園・運動公園的であってほしい（親水中心）
上　島　久　人	・災害のない安全で子供達が自然に親しんでもらえる
河　村　優　子	・子供といっしょに遊べる楽しい
稲　辺　謙次郎	・水辺が楽しい
伊　藤　明　生	・自然探索のできる
矢　沢　章　一	・高遠ダムから毎日少量でもよい水が流れる（ダムより弁財天橋間）
井　出　　靖	・豊かな自然のある
横　内　　正	・草や木や鳥や虫の息づかいにそっと触れられる
板　山　高　夫	・美しい
藤　沢　陽　一	・一部でもいいから自然のままの流れと川原を取り戻すことのできる
吉　澤　正　徳	・子供の頃は平岩等深いところが多々あった。ゆめを持てる川
前　林　賢　一	・みんなに親しまれる
坪　木　澄　人	・おおぜいの人であふれるような

塩見岳グループ

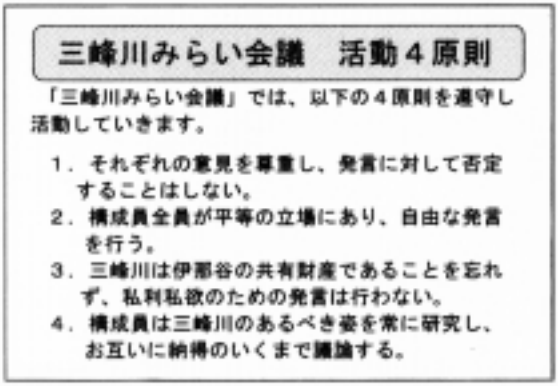
氏　　名	三　峰　川　へ　の　お　も　い
中　村　晴　一	・魅力的な空間の
小　川　文　昭	・いい風の源である
奥　田　隆　利	・アピールできる
井　口　秀　賢	・建設省から独立した
若　林　　仁	・水害の全く心配のない、水の青い
丸　山　宏　一	・流れる川の中で水の良さ、こわさの体験できる
小　椋　初　夫	・水泳のできる
吉　田　保　晴	・自然観察ができる
堀　井　美代子	・美しい水の流れる
北　原　信　吾	・美しい水であり常に流れている
中　山　千万樹	・自然のままの美しさをたたえた
埋　橋　良　和	・自然豊かな親しみある
山　田　幸　好	・自然環境の保全された親しめる川
林　　充　憲	・小動物の生息空間を重視すると共に人間の使い勝手を考えた
若　林　敏　明	・あくまで豊かな川
織　井　秀　夫	・毎日の生活に密着した
木　下　茂　人	・心のふるさとになる

ｃ．みらい会議会員証

みらい会議メンバーが、会員としての自覚と責任感を持って活動してもらうため、名刺のひと回り大きいサイズの会員証を全員に渡しました。この会員証には、本人の顔写真もつけ相互に顔と名前を一致させるのに役立たせました。

表面

裏面



三峰川みらい会議　活動４原則

「三峰川みらい会議」では、以下の４原則を遵守し活動していきます。

1．それぞれの意見を尊重し、発言に対して否定することはしない。
2．構成員全員が平等の立場にあり、自由な発言を行う。
3．三峰川は伊那谷の共有財産であることを忘れず、私利私欲のための発言は行わない。
4．構成員は三峰川のあるべき姿を常に研究し、お互いに納得のいくまで議論する。

会員証の色は、
- 仙丈ケ岳グループ：青色
- 東駒ケ岳グループ：緑色
- 塩見岳グループ　：黄色
- 事 務 局　　：赤色

としました。

②　情報を共有する

メンバーの連帯感を深める方法としては、共同の作業を通じて、相互の持つ情報が交換しあえることも、大切な方法です。

みらい会議では、後に述べるように地図作製や、考え方をまとめる過程においてすべて共同作業を採用しました。また、有志で三峰川へ見学に行く行動も、同じ状況を同じ場で体験してその感想を述べ合うことから、大きな連帯感が生み出されました。

さらに、会議に参加できなかったメンバーに対しても、最低限会議の様子や検討過程を紙面でお知らせようと、「三峰川みらい通信」を発行していきました。（平成９年度中で、計７回発行）これによって、出席メンバーにとっては討議内容の確認ができ、欠席メンバーには次回出席への足がかりを与えるなど、61名の連帯感を常に保つようにしました。

「三峰川みらい通信」は、顔写真入りの名簿、関連団体の行事紹介、三峰川の歴史探訪など、会議の結果以外にも記事をのせて、速報性と話題性のある内容としていきました。みらい会議メンバーからの投稿をもっと載せたかったのですが、メンバーの皆さんも忙しく、また会議終了後の速報の役割もあったため、紙面上での情報交換まではいきませんでした。

三峰川みらい通信　第1号

第1回　「三峰川みらい会議」　8月21日に開催

ブループ別名簿

（地形をグループ）

三峰川みらい通信　第5号

巨石を登り越え、落ち葉を踏みしめながら渓谷美を実感！

第2回「三峰川ウォッチング」　11月1日に開催

-1-

3）グループごとのワークショップ運営

①　3グループに分けて運営

当初、私たちの予想をはるかにこえる55名の応募者という状況に、正直驚きました。嬉しい気持ち8割、困った気持ち2割といったところです。（人によってこの割合は違いますが。）困った気持ち2割の中身は、親近感のあるワークショップをしようと考えていたため、どのような形で話し合いの場を設定したらよいのかという悩みでした。

私たちは悩みました。応募理由や将来像に望むことの内容で選別することは到底できませんでしたし（それ程みなさんの文章は熱意がある思いが書かれていました)、ワークショップに適当な人数にすると7～8グループくらい細かく分かれてしまい、事務局の運営も大変になるし……と。

そこで、私たちは自分たちの運営上の都合（！）から、とりあえず20人ずつの3グループに分けさせてもらいました。20人でも話し合いやワークショップには多すぎる人数でしたが、始まってみなければ人数の変動は読めないという考えもあってこの形にしました。結果的にいうと、1年目の活動終了時に継続の意志を表明したメンバーは41名になっていました。1グループ平均13名ですから、適当な人数に近づいていたともいえます。これから言えることは、様々な理由によって中途退会者が出てくるので、最初から余り絞る心配をする必要はなかったということです。さらに、中途退会者も一度はみらい会議のメンバーとなっていたわけですから、今後の活動拡大の際に、有力な人材として期待できます。

グループの分け方については、性別、年齢の構成比を均等にし、職業として公務員や建設・建築の専門家は偏りがないように配分しました。女性のメンバーが、最終的に0名になってしまったことは、とても残念でした。これには反省する余地があります。(会議時間の遅さと、回数の多さ、そして、男性が多すぎた（？）ことあたりが思い浮かびますが･･････)

また、三つのグループはそれぞれ話し合うテーマや内容は全く同一でしたから、結果的に3グループが競争することになり、良い意味で切磋琢磨することができました。グループごとの持ち味の違いを出しながら、最後に合体することができ、1グループで運営するよりも数段良いものができたと考えています。

②　グループリーダーの選出

三つのグループには、私たち事務局も担当を決めて３～４人ずつはいりました。しかし、グループの意見をまとめる役や、別途開催される「みらい検討委員会」へ出席する代表者として、グループリーダーを選出する必要がありました。あくまでも住民が主体となって討議の結論を出していきたかったものですから、グループリーダーの存在は不可欠でした。

そこで、第１回目の初めての会議の場で、グループごとにリーダー選出をお願いしました。いわゆるサクラなどは全くなく、ぶっつけ本番でみなさんに互選をお願いしたところ、立候補者も出ていただき、私たちの心配は無用でした。２名の枠に３名が出馬したグループでは、簡単な演説をした後に多数決をしたほどです。

こうして選出されたグループリーダー計６名の活躍には目を見はるものがありました。

4）話し合いでの運営手法

みらい会議は、第１回目からずっとワークショップの形で進めていましたが、この会議の成果として期待されていた二つの課題の話し合いに対して用いた手法をここに紹介していきます。

その二つとは、三峰川将来像計画の基本方針（三峰川全体の将来あるべき姿像）とエリアごとの将来像（重要なエリアごとの整備・保全・利用の方針）です。前者にはＫＪ法を用い、後者にはマップづくりの手法を用いました。

①　ＫＪ法

ＫＪ法は、川喜田二郎氏が考案したデータの整理方法であり、氏の頭文字を取ってＫＪ法という名で呼ばれています。

“三峰川の将来像を描く”という漠然とした内容の議論を進めるには、最適な方法として採用しました。ＫＪ法には各自の頭の中にぼんやりとして体系立っていない思いや意見の断片を、一枚の紙の上で明確な図式的構造として浮かび上がらせる力があるのです。

実際の会議では、次のように進められました。

〈ステップ１：自由に意見を出し合う〉

三峰川にとって大切なことや各自が望むことを、フセン紙（裏面に帯状の粘着面が付いているメモ用紙）に自由に記入し、それを簡潔に発表しながら模造紙に貼っていきます。

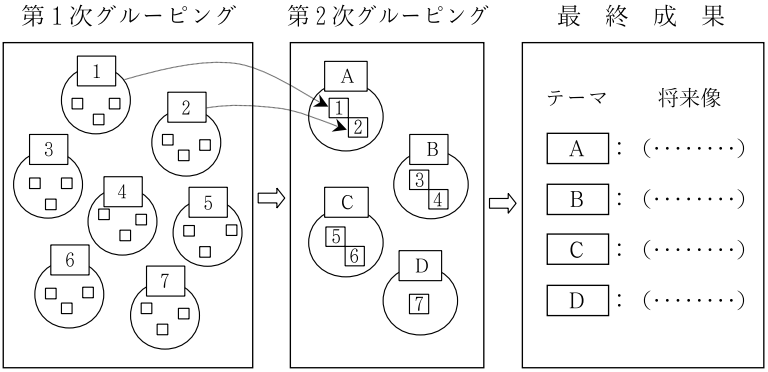
（写真）

〈ステップ２：意見をグルーピングする〉

ひととおり全員のフセン紙を貼ってから、それぞれ似ているものや関連が深いもの同士を近くに貼り直し、フセン紙の固まりをつくっていきます。そしてその固まりを表現するタイトル名を付けます。以上の作業をグループの全メンバーの総意で進めます。（写真）

この後は、グルーピングの作業を大きなテーマが３～５個くらいになるまで繰り返して行いました。（次図参照）

〈ステップ３：グルーピング作業の繰り返し〉



このようにして、最終的には、環境面、治水面、利用面の大テーマのもと、合計10本の基本方針がつくられました。（第３章の７）参照）

②　マップづくり

三峰川全体をエリア分けして、具体的な将来像の方針や方策などを検討するために、5000分の１の縮尺の川の平面図の上で、将来像マップづくりをしました。

〈ステップ：１〉

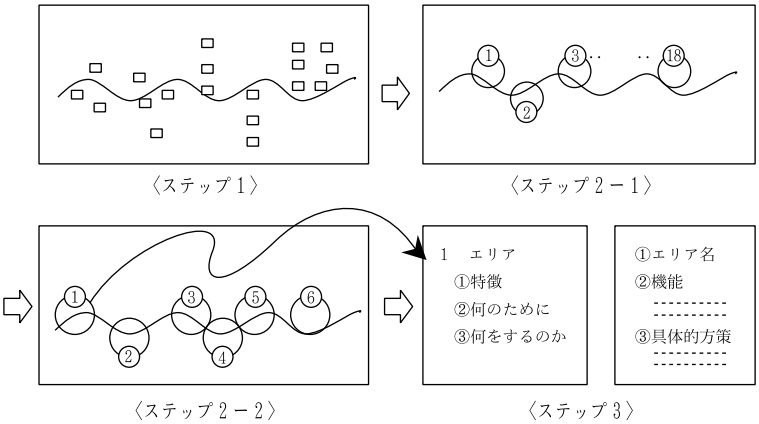
まず、基本方針を決めた後に「どのようにしてその基本方針を実現化していくのか」を具体的な場所を示しながら、フセン紙に書いて貼っていきました。

〈ステップ：２〉

各グループのメンバーが貼ったフセン紙の分布状況を全体的にながめてみると、18箇所程の拠点が浮かび上がってきました。これを、位置の近い拠点どうしをひとまとめにしながら六つのエリアにまとめました。将来像マップの議論のベースができたわけです。

〈ステップ：３〉

３番目には、六つのエリア分けした地図をみながら、エリアごとに「何のために」「何をするのか」という項目で各グループごとに話し合いをし、やはり様々な意見を出し合って討議していきました。これをもとに、各エリアの名称、機能、具体的な方策を決めていきました。



5）みらい会議メンバーの自主活動

みらい会議の活動は、室内での話し合いだけではありませんでした。会議メンバーの自主活動として、三峰川ウォッチングが行われました。

ワークショップの重要な要素に、体験の共有や遊びの要素があります。三峰川という自然を相手にした話し合いなのですから、相手を知っていることが大切です。しかし、最近の三峰川は知らないという人も結構いました。メンバーが一緒に三峰川へ行って現状を理解し、共同作業に反映するということは、とても重要なことでした。

メンバー自らが企画し、平成９年度中には場所や目的を変えながら、計３回のウォッチングが行われました。

	コース	日　時	参加者数	企画者	ゲ ス ト 等
第１回	三峰川橋左岸～ 榛原河川公園	H9. 9. 27(土) 8:00～11:30	24名	高島良幸 白鳥　孝	高山光弘氏 (信州ビオトープの会)
第２回	虹橋下流～ 高遠ダム	H9. 11. 1(土) 12:30～17:00	23名	矢澤章一 丸山宏一	酒井昇治氏 (信州高遠少年自然の家)
第３回	三峰川橋～ 榛原河川公園	H9. 12. 13(土) 8:30～12:00	15名	吉田保晴	吉田氏作製のウォッチング用冊子配布

３．みらい会議メンバーの意見がまとまるまで

「まるっきり違う意見をどのようにまとめていくか楽しみです」(40歳代、女性)。

「結論を出すのは非常に難しいと思われるが、ある一定の方向は出す必要がある」(60歳代、男性)。

これは、第１回みらい会議の終了後のアンケートに書かれていたあるメンバーの感想です。私たち事務局も、61人もの人々が、ひとつの意見、いえ、ひとつの方向にすらまとまるんだろうか？　と、とても不安でした。行政の立場からいえば、治水のある最低ラインは守らなければならないし、参加メンバーには地元の意見を代表してきている人もいるようだし。ともかく、61通りの思いや意見がある中で、私たちは一定の合意形成をするために、いろいろなやり方を試行していきました。

「この会議が全国のどこにもないオリジナルなものになればよいと思います」(30歳代、男性)。

こんな参加メンバーの熱意と優しいまなざしに支えられて、メンバーの意見をまとめていく道のりが始まりました。

1）まず、三峰川のこと知らなきゃね！

みらい会議に応募していただいたメンバーは、三峰川の計画への熱意と意志は充分あるみなさんです。しかし、いつも身近を流れている三峰川のこととなると案外知らないものです。メンバーの要望もあり、まず全員が同じ情報量を持ち、同じ条件下で話し合いができるよう、勉強のための時間をとることにしました。

行政からは、三峰川の川としての特徴や過去の災害等の歴史、そして植物・動物・景観などの自然特性の調査結果を整理して提供しました。資料は、事務局からスライドやＯＨＰなどを使ってメンバー全員に説明しましたが、なかには難しい専門の言葉もあるため、すぐに理解されたわけではありませんでした。

そこで、さらに計画上留意するポイントとして、治水に関するアドバイスと、環境に対するアドバイスという形で簡略化した要点集を全員に配りました。これでも、やはり完全に理解されたとは言いがたかったと思います。

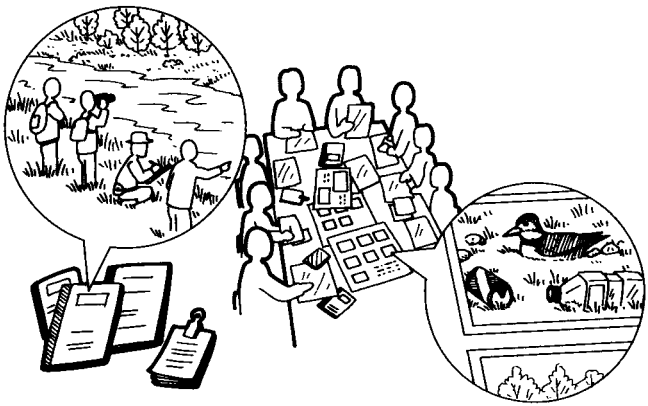
イギリスの諺に、こんなものがあります。

TO HEAR IS TO FORGET　　（聞くことは　忘れること）
TO SEE IS TO REMEMBER　　（見たことは　思い出すこと）
TO DO IS TO UNDERSTAND　　（やったことは　理解すること）
TO FIND IS TO USE　　（発見したことは　使えること）

三峰川のことを知るには、文字情報に加え、三峰川に行って見て、聴いて、触れて、感じることが一番でしょう。メンバーは、会議設立当初から、「三峰川ウォッチング」という自主企画を始めていました。事務局が仕掛けるまでもなく、“まず三峰川を知ろう！”は、知識のお勉強だけでなく、現地での体験を通じた学習になっていったのでした。

この三峰川ウォッチングは、その後計３回開催されました。

（第２章の５）参照）



2）ここでは、全員からだを動かしてもらいます！

参加者が相互に意見を交換したり、物事を決めていく際に、ワークショップは有効なやり方です。このワークショップの特徴のひとつに、グループの創造行為とそれを通じた合意形式ということがあります。

みらい会議のメンバーには、おとなしく席に座って、たまに口を動かせばよいと思っていた方もいたかもしれません。それが、従来の会議というものの形でしたから。

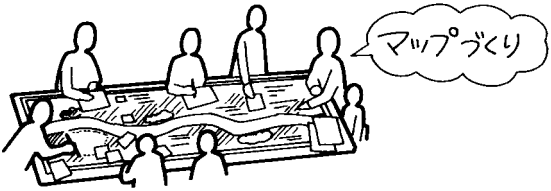
ところが、私たちは、口も手も、時にはからだまるごと動かしてもらうやり方をしていきました。“TO DO IS TO UNDERSTAND”です。

私たちがワークショップで採用した手法については、前章で述べていますが、ここでは、時空をかけめぐった「三峰川の昔・今・未来マップづくり」と頻繁に使った「ＫＪ法」の様子を紹介します。

①　三峰川の昔・今・未来マップづくり

“三峰川の昔はよかった”という声を、特に年配のメンバーの口から聞いていました。私たちは、メンバー全員がもっている三峰川情報をひとつの図面の上に表現してみれば、みんなで共有する貴重な三峰川マップになると考えました。少なくとも三世代分くらいの情報マップにしようとしました。

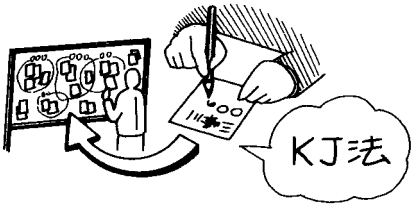
年配の人も、子供と一緒によく川に行く父親世代の人も、各人の記憶にある昔を披露することは、とても誇らしげで楽しそうでした。フセン紙（裏面に帯状の粘着面が付いているメモ用紙）に、昔の記憶をたくさん書いてこれを地図上の該当する場所に貼りつけてもらいました。長さ２ｍ余りもある図面の前で、あちこち移動しながらそれを貼る時は、当時の想い出話なども交え、一言（中には三言、四言の人もいましたが）ずつ発言してもらいました。今と未来についての発言も



同様でしたが、未来についてすべてのみなさんに語るだけの思いがあったようで、何枚ものフセン紙が図面上に貼られていきました。

こうして、自分の記憶や思いを、具体的に口に出したり、文字に書いたりして、地図上のある場所に貼りつけるという作業が行われていきました。なかには、最近三峰川に行って見てきたんだ、というメンバーもいたほどです。この三峰川マップづくりは、頭だけでなく、からだを動かしながら時間と空間を越えた情報地図として創作されていったのです。

②　ＫＪ法



ワークショップ全体を通じて、メンバーの思いや意見を集約して、あるまとまりを持った言葉を創り上げていく作業に、ＫＪ法を使いました。（ＫＪ法については、前章参照）

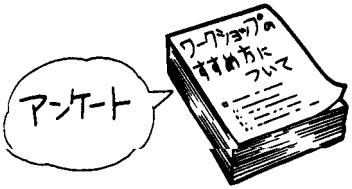
基本的には、フセン紙に自分の意見を書いて、それを前方の模造紙の前で発表しながら、模造紙の上に貼り出してもらうのですが、全員が一度はメンバーの前で自分の考えを発表しなければならいことと、同じ意見の紙を見つけて、その紙の近くに自分の紙を貼るという作業が特徴です。

意見をいいっぱなしでなく、他のメンバーとの共通点、相違点を知ることができるこの方法は、各人がそれぞれ手を動かす主役となる場面を持てたこととあわせ、討議へのはいりこみ方が深くなるものでした。特に、フセン紙は何度でも貼り直すことができますから、グループ討議の最中にも、メンバーによってフセン紙の移動はどんどん行われました。これは、メンバーの考えを、目に見える形にしていく創造行為の醍醐味といえるものです。

頭の中の整理がなかなかつかない時に、口と手と足を使ってひとつの紙面上でそれを全員参加で様々に試行錯誤してみる場、それが全員参加のＫＪ法の良さだったように思います。

③　ワークショップ進行方法へのアンケート

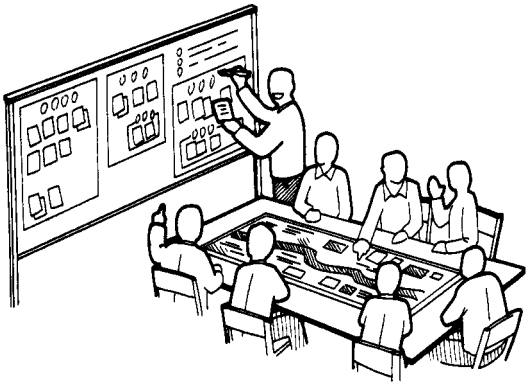
私たち事務局も従来あまり採用してこなかったワークショップの進め方に対して、参加者の感想をアンケートによって把握しようとしました。全員参加型で、自由にものがいいやすい雰囲気は是非継続して欲しいなどの感想があり、進め方の大筋は認められていたようです。



3）どんな意見も受け止めます、貼りつけます！

誰もが、自由に意見を表現できる ── このことは、三峰川みらい会議で一貫して守られていました。これは、設立当初に全員で確認し合った「活動四原則」（第１章参照）によるところが大きいものでした。

それに加え、ワークショップの場では、私たちはＫＪ法をはじめとして、メンバーの意見や疑問などを、できるだけそのまま受けとり、それを板書したり、フセン紙に書いて貼っていきました。どんな意見も、否定せず、全員の前に表していったのです。



“どんな意見でも受け止める”というのは、発言者からしてみれば、その場での自分の存在を確かなものにすることができます。誰しも、無視されたり表現を抑制されることは気分のいいものではありません。一定のルールにのっとっていればどんな意見でも受け止めたことで、メンバー間の円滑な人間関係を信頼の上に築くこともできたと思います。

私たちは、板書等の技術がまだまだ未熟であったため、メンバーの意見を記述する際に相互のかかわりあいや全体構造をその場でうまく表現できませんでした。しかしながら、とにかく発言内容だけは記録したり表現しようと努めました。運営スタッフの未熟さは、会議メンバーからの助けによって補足されましたし、少し時間をおかないと見えてこない関係もありました。相互関係はわかりずらくとも、その場で何が話し合われているか、どんな意見がそれまでに出されたかを目で確かめながら前へ進むことができたと考えています。

4）落ちこぼれなんて言わせません！

ワークショップでも会議でも、声の小さい人、発言が不得意な人はいつもいます。私たちは、発言者に偏りがないように、全員から意見を引き出すことに努めました。

そうはいっても、発言しにくい人の代弁をする訳にはいきませんから、フセン紙に書いてもらったり、発言を促すように時には直接声をかけたりしました。

議事進行は、グループで互選されたリーダーが主にあたりましたから、私たち事務局はあまり全面的には前に出ないようにしましたが、それでもワークショップの際は、全体を見渡しながら、声を掛けたり個別にお話ししたりと、その場の雰囲気を和やかなものにしようと努めました。

参加者の中には、聴覚が少しご不自由で、なかなか他のメンバーの意見が聞き取れなかった人もいらっしゃいました。いつも静かに聞き入って下さったそのメンバーの方は、ある時ご自分の意見を手紙にして私たちに伝えてくれました。出席しながらもなお意見が伝えにくいメンバーにとっては、個別に手紙という方法に託してメッセージを届けてくれたのです。私たちは感激しながら、拝読させてもらいました。

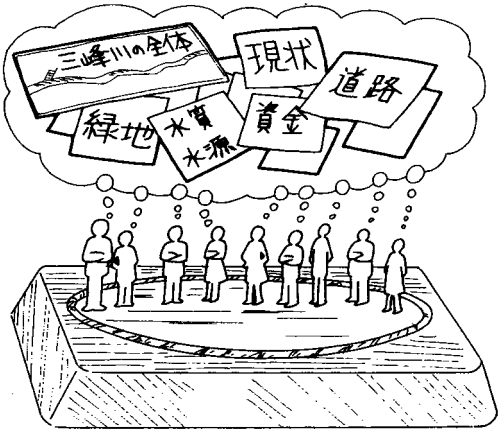
こうした私たち事務局の役割は、あくまでも中立的な立場であるべきです。行政としての思惑や考え方はあったとしても、住民主体のワークショップの場では、明らかな矛盾や問題点の指摘を除けば、参加メンバーの意見が出やすくすることに徹し、メンバー自らが判断し、合意形成していくことを促進することが望ましいと考えます。従来の会議での議長のような立場ではなく、ワークショップ等で、このような役割を行う人のことをファシリテーター（促進する人）と呼ぶことがありますが、私たちは、まさにファシリテーターをさせていただいたともいえます。

5）そして同じ土俵にみんなが乗ってきた！

みらい会議メンバーの中では、三峰川に関する情報交換や現地での体験を通じて、川の環境、治水、利用の各々の面で共通認識ができてきました。

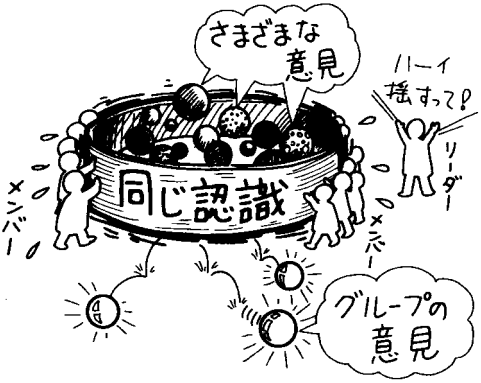
最近の調査結果や、各メンバーの持っていた三峰川情報、そしてそれから見えてくる三峰川の全体像をメンバーが共有してきたことで、三峰川の特徴、問題点、課題などが徐々に明らかになっていったのです。それは、三峰川の将来像の基本方針を全員の総意で創り上げる作業において最初に効果を表しました。

同じ土俵に乗ってきた結果、各メンバーからの発言が、共通の言葉を使いながらまとまりのある内容になってきました。もちろん、各メンバーの独自の発想は残しつつですが。



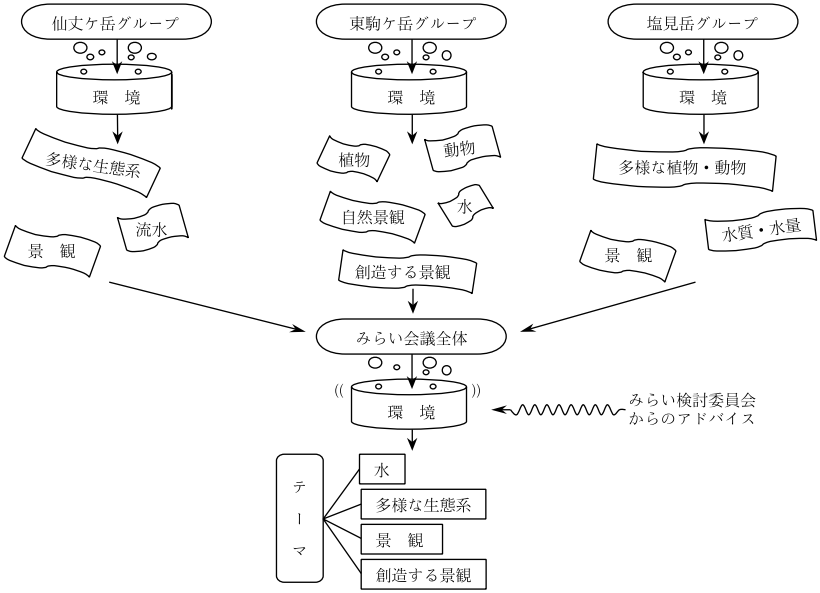
6）同じフルイを揺すってみれば……。

共通の認識という“フルイ”をもったみらい会議は、この“フルイ”を使って基本方針と各エリア（三峰川を六つのエリアに分けました）の機能や具体的な整備・保全・利用の方針を討議していきました。それは、メンバーの様々な意見を“フルイ”にかけて、みんなで揺すりながら、グループの意見におとしていったといえます。

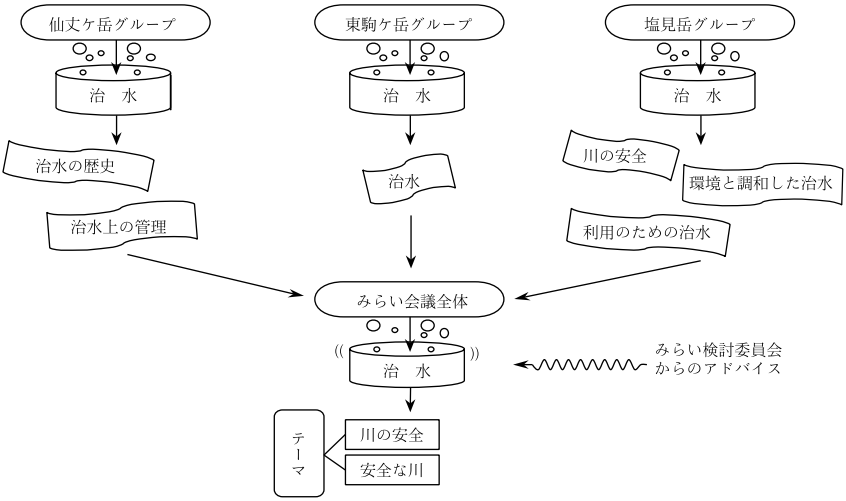


例えば、基本方針の討議の時には次のように意見がまとまっていきました。

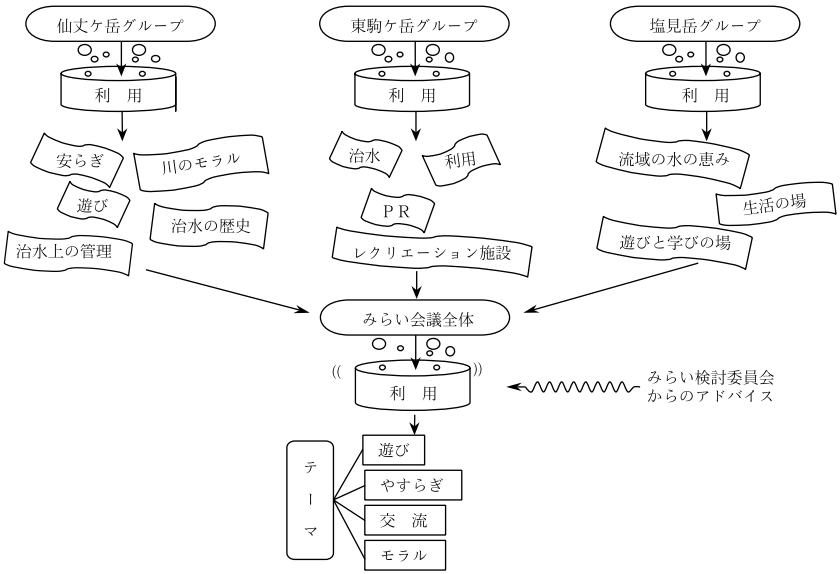
〈環境のテーマの場合〉



〈治水のテーマの場合〉



〈利用のテーマの場合〉



この他に、「将来像計画」で、六つのエリアごとにその機能や具体的方策案を検討する際には、各エリアにおいて①特徴、②何のために、③何をするのか、という視点でグループごとに討議し、それらを持ちよって、みらい会議全体としての方向性を出していきました。

フルイの機能は、次のような傾向があります。例えば、三峰川全体が目指すべき方向とは異なるある特定の整備内容や、三峰川以外でもできる内容などは、フルイの網に引っかかってしまいます。また、似かよった意見は、統合され全体的に丸みをおびてスマートな形でフルイの網を通り抜けることもあります。三峰川がどんな川なのか、どんな川として大切にし、利用し、そして治めてゆけばよいのか……。これらのことが、フルイの網目の大きさを柔軟に変化させながら、つまり各人の意見を吟味しながらグループ全体の意見として通過させていったのです。そして、フルイを通過した下には、磨かれた玉のように光る言葉が生み出されていました。

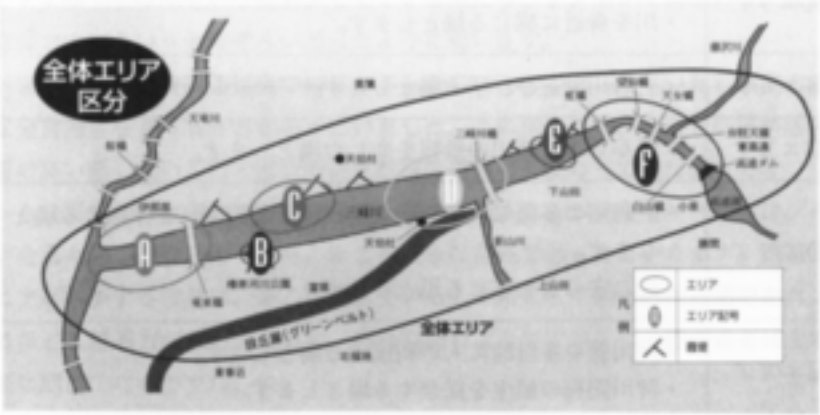
7）みんなでつくりあげた珠玉の言葉

これまでの過程を経て最後にできあがった主なものは、基本方針（案）と各エリアの方針・方策（案）でした。これらを、みらい検討委員会での検討や、流域住民からの意見・要望ハガキによる修正を経て最終計画としていきました。全戸配布されたパンフレットも事務局側で作成し、広く住民に知らせ、また意見を求める一手段としました。

このようにして、みらい会議の合意形成はすすみ、荒削りの生の意見や思いが、同じ認識というフルイを通じて誰からもわかりやすく丸みのある珠玉の言葉へと変容していきました。委員会や住民からの指摘は、さらにその言葉に磨きをかけるものとなりました。

メンバー全員の意見が納得されるまで話し合った結果、自分の意見がそのまま通った人も、通らなかった人もいたと思います。しかし、あるひとりのリーダーが意見を引っ張っていったのではなく、１枚１枚のフセン紙や一言一言の発言から積み上げていき、そしてそれらを練ってつむぎ出した結論は、メンバーの生み出した考え方として大切にされています。

三峰川将来像計画



三峰川全体の整備・保全・利用方針

① 三峰川が本来所有する自然環境（動植物、景観等）の回復及び保全をする。

② 周辺の田園、段丘崖、桜並木などの景観を保全、創出する。

③ 治水の歴史と治水施設を保全する。

④ 美しい、ゴミのない三峰川とする。

⑤ 全川をつなぐネットワークを構築する。

⑥ 川の楽しさ、恐ろしさを学ぶしくみづくりをする。

エリア別の整備・保全・利用方針

Ａエリア	・三峰川と人との関わりの歴史を知る場とします。 ・川を身近に感じる場とします。
Ｂエリア	・三峰川で遊び、学ぶ場とします。
Ｃエリア	・昔からの三峰川の景観を楽しむ場とします。
Ｄエリア	・三峰川の多様な自然環境（動植物・景観等）を体感する場とします。 ・心の安らぎを感じる場とします。
Ｅエリア	・河川敷を多目的に人が利用する場とします。 ・河川固有の植生を保全する場とします。
Ｆエリア	・子供達の冒険心を誘う場とします。 ・町なかを流れる三峰川を身近に感じる場とします。

8）リーダーの活躍は忘れてはなりません！

三つのグループで互選されたグループリーダーが、ワークショップで活躍していただいたことは、私たち事務局の心強い力となりました。

リーダーの代表的な活躍は、およそ次の三つにまとまります。

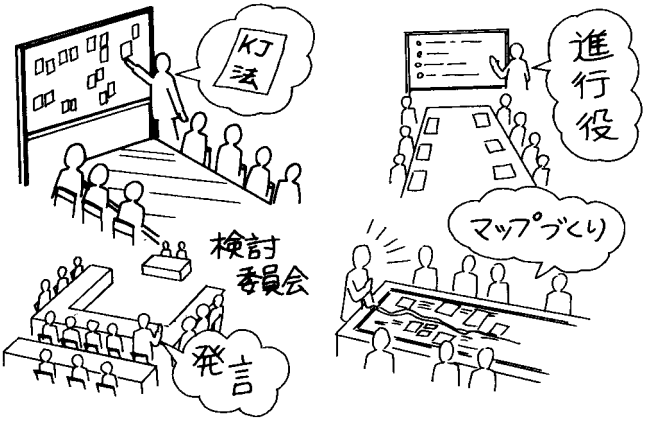
① ワークショップの作業における進行役。
② ＫＪ法やマップづくりでの率先的作業者。
③ みらい会議代表者としてのみらい検討委員会での発言者。

グループリーダーは、第１回みらい会議で立候補し、その場の演説を経て互選された人だけに、パワーは充分持った人達でした。それにも増して、常時10人前後のメンバーをとりまとめていくのは、頼もしい存在としていつも輝いていました。初めてあった人々の集まりで様々な意見を聞きながら、試行錯誤していくのは、事務局の私たちですら大変でしたから、ぶっつけ本番のリーダーの手腕は“会議の達人”の感すらありました。ＫＪ法には少し慣れているリーダーもいま

したが、それをまとめたり、くっつけたり、そして新しい言葉を創ったりという創造行為は、苦しみながらも楽しんでいる様子でした。「これがＫＪ法の醍醐味ですよね！」なんていう発言まででてくるあたり、タダモノではないな！（良い意味です）という強者ぞろいだったように思います。

また、みらい検討委員会でのリーダーたちは、ものおじしない発言態度と適確な発言内容をきっちりとおさえていました。この様子から、みらい会議が活発で質の高い話し合いを行っていることが他の委員にも伝わっていたようです。

合意形式をした内容を公式の場でうまく伝えることができるリーダーは、みらい会議全体をふりかえっても、とても大きな存在であったといえます。流域住民にアピールする言葉は、そこに住んでいる人々によって創られた言葉であればあるほど、浸透力が強いようです。当たり前のようですが、“土地のことは土地の人に聞け”なのですね。



9）そして１年目は終わり、２年目へとつづく…。

このようにして、平成９年度は三峰川将来像計画の全体的な基本方針と、各エリアの方針をみらい会議で創り上げていきました。

１年目の三峰川みらい会議は、合意形成をしていくことが重要なテーマでしたが、メンバーそれぞれが満足度の高い結果となったようです。それが、次の第４章に示す、メンバーの感想に表われています。

２年目にあたる平成10年度には、将来像を机上で議論するのでなく、メンバー自らができることをやってみようということになり、やはりＫＪ法を使いながら最終的に四つのプロジェクトチームをつくって活動をしました。

また、将来像を実現していくにあたって、広く地域のみなさんの参加を前提とした「行動方針」もメンバー全員で話し合い決めていきました。２年目の活動は、まだ完了していないので、その内容をご紹介するのはまた別の機会にしたいと思います。

４．三峰川みらい会議に参加して

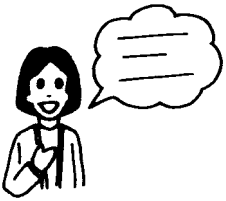
1）三峰川みらい会議・会員

これは、平成10年３月27日に開催した「第７回三峰川みらい会議」において、メンバー全員で“三峰川みらい会議に参加した感想”や“今後、みらい会議として行いたいテーマ”について語り合った内容について要約したものです。事務局が各メンバーのご意見やご感想を要約していますので、発言の趣旨とニュアンスが違う場合もあると思いますがご容赦下さい。（以下敬称略）

○若林　徹男（仙丈ケ岳）
・三峰川というとやはり災害の想い出が非常に強い。最近では上流にダムができたりして大きな洪水は無いが、今後も災害のことも踏まえて検討する必要がある。

○藤木　　満（仙丈ケ岳）
・最初のうちは消極的な参加だったが、出席しているうちにメンバーの熱意にあおられてここまでできたと思う。
・会議では、「自分が三峰川の近くに住むとしたらこんな川にし

たい。」という意見を述べてきたが、今後もそういった意見を述べていきたい。



○成田　郁美（東駒ケ岳）
- メンバーそれぞれが非常に活発で、メンバーが中心となって会議が進んでいた。
- 多くの方々が議論することにより様々な意見が出たし、それらの意見が良い方向にまとまっていった。
- 年齢が下がるにつれて、三峰川に対する想いが薄れてしまっているように感じる。

○北原　　武（仙丈ケ岳）
- 会議の中では意見を発表することは無かったが、自分のためにはなったと思う。
- みらい会議で十分議論し、アンケートで住民の声を聞き、それを反映しながら計画をつくっていくことは、とても素晴らしいと感じた。

○丸山　宏一（塩 見 岳）
- 皆さんのご協力とご指導により、塩見岳の代表者として務まっている。
- 外来種がはびこっているので、みんなの力で排除したい。
- 「川を知るには源流を知ろう。」ということで今後企画したいと思う。

○高澤　　勝（東駒ケ岳）
- 高遠ダム直下に水が無いということが一番残念である。何らかの方法で水の流れのある川にしたい。
- 合流点付近は、川辺の鳥を見ることができ良い場所となっているが、カワウが最近増えているので魚類に対して心配。今後の課題として検討して欲しい。

○早川　信光（伊那市役所）
- ＮＧＯなどから、もっと厳しい意見が出ると思っていた。
- 自然環境の保全重視の意見が強く、整備的な意見が少なかった。
- 合流点付近の利用形態についての議論がもっとあって欲しかった。

○斉藤　正秀（高 遠 町）
- 昔を想いながらの三峰川と、将来こうあって欲しい三峰川を検討する中で、地域の皆さんの三峰川になって欲しい。

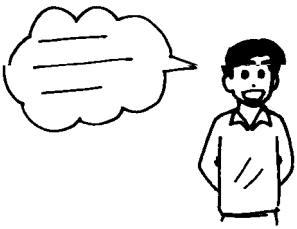
○吉沢　政己（仙丈ケ岳）
- 年齢層が幅広く、いろんな意見を聞くことができて、魅力のある会議であった。
- 全国的にもあまり例のない会議に参加でき、非常に誇りに思う。
- 計画の実施に際しては、防災的な事業を進めていくことがまずは必要であり、また、みらい会議などによるソフト的な事業も大切だと思う。

○伊藤　明生（東駒ケ岳）
- 多くの方の意見や三峰川に対する想いなどを聞くことができ、非常に参考になった。
- 計画の実現の中で、メンバーの一部でも実戦部隊となっていけば素晴らしいと思う。

○堀米　秀樹（塩 見 岳）
- 応募した時は１、２回で終わる程度の会議だと思っていたが、皆さんの熱意を聞き、そうではないことに驚いた。
- メンバーの熱意によりつくりあげられた計画が、今後実現していけば素晴らしいことだと思う。

○大瀬木恵一（東駒ケ岳）
- みらい会議に参加したことを契機として、新しい三峰川との関わりができるような気がする。
- 当初は自然環境保全のみの考え方だったが、皆さんの意見を聞くことにより、この三峰川へみんなが来てほしい、愛してほしいと思うようになった。
- ナイスロードの景観は十分に配慮していく必要がある。
- みんなが三峰川を大事にするというしくみづくりが重要。

○坪木　澄人（東駒ケ岳）
- 過去の災害を知っているため、三峰川という川は大嫌いだったが、「三峰川をどうすれば良いのか。皆さんはどう思っているのか。」を知りたかったので応募した。
- 皆さんがとても熱意をもって議論され、川のすぐ近くに住む人間としては、とてもありがたかった。



○吉田　保晴（塩 見 岳）
- 色々な価値観をもった方と議論できて良かった。
- 現在は足を一歩踏み出した

ところで、これからが重要だと思う。

○木下　茂人（塩 見 岳）
- みらい会議では大変勉強をさせていただき、また大きな感銘を受けた。
- メンバーの様々な意見をうまくまとめていった検討の手法が素晴らしかった。
- 計画としては良いものだと思うが、地域の人々が利用する面がもう少しあっても良いのではないか。

○久保田政志（高 遠 町）
- メンバーの皆さんの三峰川に対する熱意が伝わってきた。
- 計画が目に見えるものとなるように、実現に向けて期待している。

○前林　賢一（東駒ケ岳）
- 現在は計画がぼんやりと決まった段階である。今後さらに具体的に検討し、計画の実現を見つめていく必要がある。
- 三峰川がいかに再生し、そして共生していくのかを、今後も見守りながら会議に参加したい。

○木嶋　幹勇（仙丈ケ岳）
- 三峰川の近くに住む人間と、離れて住んでいる人との考え方の違いに温度差を感じた。
- アンケート結果を見ても分かるとおり、子供達は榛原河川公園などの施設を利用するケースが一番多い。河川内に施設を整備して、そこから川との親しみができるようにするのが良いのでは。
- 竜東橋下流の検討があまりにも不十分。今後検討してほしい。

○若林　　仁（塩 見 岳）
- メンバーそれぞれが様々な意見を持って参加しており、感心した。
- 三峰川の将来を考えていくことを楽しみとして、今後も参加していきたい。

○二宮　孝治（仙丈ケ岳）
- 計画自体はやっとベースラインにのった段階であり、今後この計画をどう実現し形にしていくかが一番重要である。
- 計画の実施にあたっては、特に自然環境は分かっていないことが多いので、会議の中で研究しながら進めていくことが大切。

○高島　良幸（仙丈ケ岳）
- この会を通じて出会えた喜びは皆さん共通だと思う。
- 「三峰川みらい財団」という組織をつくって、キャンプ、駐車

場などで利用する方々からお金を徴収して、それを活動費にあてる。

・「三峰川ハンドブック」をぜひ発行したい。

○酒井　美穂（伊那市役所）
・皆さんの三峰川に対する熱い想いにより、色々と勉強させてもらった。

○稲辺謙次郎（東駒ケ岳）
・三峰川と山とを一体のものとして考えていきたいと思っている。

○井出　　靖（東駒ケ岳）
・みらい会議に参加し、皆さんと議論できたことは、うれしく思っている。
・ビオトープをつくるということに参加できればと思っている。

○井坪　　聖（高 遠 町）
・川というものはやはり水が流れているもの。清流流れる川であって欲しいと思った。

○小川　文昭（塩 見 岳）
・具体的な計画の実施においては、地区住民とも検討していくということなので、そういった中でも今後参加していきたいと思う。
・流域で行われている農業のあり方についても考えていく必要がある。

○小田原光計（仙丈ケ岳）
・三峰川の自然環境というものに興味を感じている。今後も皆さんと一緒に自然環境について考えていきたい。

○鈴木　　孝（仙丈ケ岳）
・計画の実施にあたっては、護岸の安全度なども考えていく必要がある。
・計画の実行後のことも考えておく必要がある。

○織井　秀夫（塩 見 岳）
・行政の物事の進め方というと、まずは議員、そして地元有力者などを通して行われるのが常であるが、みらい会議はいろんな方々が参加しており、素晴らしいものだと思う。
・皆さんが熱心に議論してできたこの計画を無駄にしないように。

○春日　良郎（東駒ケ岳）
・皆さんの様々な意見を、うまくまとめていくことができて素晴らしいと思う。
・計画の実施にあたり、具体的なものを地域に投げかけていく時には、文章的なものではなく、図や写真で示すなど分かり易く行う必要がある。

○山浦　健康　・まったく初対面の人々が、その
（塩 見 岳）　場でどれだけ意見を出してくれるかがワークショップのポイントだと思うが、この会議の進め方や演出の仕方は鮮やかで素晴らしかった。

○黒河内　俊　・皆さんの三峰川への想いというものは、本当に強いものだと感じた。
（東駒ケ岳）

・天竜川合流点～高遠ダムまでの区間で検討を進めてきたが、やはり川は全体（流域）を通して考えるべき。今後は全川についての検討を。

・川を語るには、川で会議を開くのも良いのではないか。

○上島　久人　・三峰川が全国的に見ても理想的な川となるように期待している。
（東駒ケ岳）　・過去の大災害というものを十分頭において、計画を進めるべき。

2）三峰川みらい会議・代表者

これは、三峰川みらい会議の各グループの代表としてご尽力頂いた代表者の方々にお願いをしまして、三峰川みらい会議に参加されたご感想を頂いたものです。（五十音順・敬称略）

①　三峰川みらい会議に参加して

塩見ケ岳グループ代表者　　木下　茂人（伊那市）

美篶村で生れ、そこで育った私の幼い頃は、三峰川とともにありました。水泳のあい間に友達と近くの畑でトマトをとっておじさんにドヤされたり、川向うの子供達と喧嘩をしたり、かじかとりをしたことなどは、今でも三峰川へ行くとなつかしい郷愁としてよみがえってきます。

その三峰川も総合開発事業でダムができて、ずい分とその姿は変わりましたが、寄せる思いは変わらぬものがあります。

この気持を汲みあげてくれるかのように、建設省天竜川上流工事事務所の呼びかけがあり、「三峰川みらい会議」のメンバーに入れていただき、未来像づくり

に参加させていただきました。

あの固いお役所が地域の人々の気持を仕事の中に反映しようとするソフトな姿勢も大きな変化でしたし、それに呼応した人々の発言や行動も、積極的、建設的なものでした。

だれもが素晴らしい三峰川の恩恵を享受したい、そして子供達にそれを引き継いであげたいという思いは強いのですが、「素晴らしさ」の内容とか、実現方法等については、意見百出、果たしてまとめることができるのかと当初は訝かりました。

しかし、建設省職員のまとめの手際は、みごとなものでした。参加者の気持は大方取り入れられたものと思います。

こうして参加者の熱意により、みらい像の絵はできましたが、その成果は、この絵が実現されてはじめて人々に恵みを与えてくれ評価されるのであります。二年目に景観形成班に入ってモデル景観を造るために現場に入り行動をしてみて、アレチウリの除去、立木整理作業を実践しようとして、壁のような困難さを実感しました。

三峰川を素晴らしくするための正念場はこれからはじまるのだと思います。

②　伊那谷から

仙丈ケ岳グループ代表者　　白鳥　　孝（伊那市）

三峰川と言う川が好きで、もう25年ほど通い続けています。それは渓流釣りであり、南アルプス登山の道すがらの川であったり、あるいはブラッと行くドライブやカメラをぶら下げての逍遙であったりします。子供を連れて戸台の化石を探したこともありました。天伯社付近で自然観察会をしたこともあります。夏の峻烈な流れに浸りながら訪ねた、原生林に流れる静かな姿も忘れません。岳沢の「ソーメン流しの滝」と呼ばれる120ｍの大滝も圧巻です。荒涼とした冬の巫女淵のたたずまいも心に残ります。天竜川の合流点から仙丈ケ岳の山頂までの長く広い範囲を、動機も心象も季節もまちまちに四半世紀に及んだ川との交感でした。

三峰川には新山川、藤沢川、山室川、黒川（尾勝谷・戸台川・小黒川）、粟沢、孤立沢、塩沢、丸山谷、大黒沢、荒川、熊沢、黒檜谷、大横川、小横川、柳沢、兎台谷、岳沢、三軒岩小屋沢などの個性的な支流が多く流れ込んでいます。下流域の新山川、藤沢川、山室川は生活の香りの強い河川で、懐が深く穏やかな表情

をもっています。そしてこれらの支流の深奥には、新山峠・杖突峠・芝平峠の、三峰川水系とは異なる水系とを結ぶ山越えの道があります。私と三峰川及びその流域との交感の始まりは登山と渓流釣りでしたが、やがて秋葉道、中央構造線、平家伝説、美和ダムへと広がる人と川との多面的なつながりとなってきました。そして気がつくと、三峰川の歴史と言うものが限りなく誇らしく、また地質学的にも類い希な大断層と屈曲とをもつ個性的な川であることが一層の興味をそそらせるのです。興味ある歴史のなかでも三峰川の繰り返してきた災害にはことのほか深い思いを寄せます。私はずっとこの流域に暮らしてきたわけではありませんが、災害という巨大な自然のエネルギーに抗いながらも生きてきた流域の歴史をもっと知りたいと考えるのです。

三六災と呼ばれる昭和36年の大災害の記憶はありません。でも昭和57年・58年と2年続いた災害は覚えています。この災害のすぐあとに、地形がまったく変わってしまった丸山谷を難渋しながら「丸山越えルート」で三峰川上流の岳沢を目指したことがありました。三峰川に下りたった時、本流がそっくり抜けてしまった様子に自然の脅威を感じ愕然としたものです。戸台川もすっかり殺風景な河原になって、「歌宿」あたりのしっとりとした水飲み場の面影は消えてしまいました。仙流荘も大きな被害をうけ、美和ダムは水面を埋め尽くす流木であふれていました。今回この三峰川みらい会議では、57災・58災の様子を多くのメンバーの方から聞くことができました。下流域の身の毛もよだつ大増水や破堤の話には思わず身を乗り出して聞いたほどです。

こうした災害の歴史は、三峰川流域の田畑や家を守るための努力の歴史でもありました。聖牛・沈床・蛇かご・霞堤・水制などは先人の治水の知恵として、三峰川の洪水の歴史はその川の性格を反映させた文化として、きちんと後世に伝えていかなければなりません。

三峰川みらい会議は、「この三峰川を次世代に伝えるために私たちは何をすべきか」を考え、行動する礎をつくる場でした。環境・治水・利水の三つにテーマを絞り論議を重ね、「三峰川ウォッチング」の実地調査をしたり、自主的な勉強会をしたりした2年間でしたが、過去に学び、今を知り考え、そして未来に向けて行動する「緒」ができたと思っています。そしてそれは、三峰川みらい会議の代表者と学識経験者、行政機関、河川管理者などで構成する「三峰川みらい検討委員会」のなかで、コンセンサスをとりながら実現に向けて一歩一歩動き始めて

います。みらい会議のメンバーが、それぞれの思いを持ち寄ってひとつの方向を見つけだし、三峰川の将来像を描きだしていく作業には時間がかかります。しかし三峰川が好きな広量な人たちが集い、考え、学び、補完しあい、混沌とした中からそれを実現させるために始めた行動は、新しいタイプの運動体でもあります。今回の対象は高遠ダム直下から下流の約10㎞ですが、三峰川という川は源頭までダムからさらに50㎞も遡ります。三峰川みらい会議では、便宜上高遠ダム直下の流域を対象としています。しかし、いずれこの三峰川みらい会議が、天竜川との関わりを捉えた上で三峰川全域を視野に入れたものに発展し、さらに伊那谷から全国に放つ嚆矢となることを願っています。

③　三峰川みらい会議に参加して

仙丈ケ岳グループ代表者　　高島　良幸（高遠町）

我家の３人の子供達が通う高遠小学校は、三峰川の瀬音と仙丈ケ岳の稜線が城下町の桜に映える一幅の絵画のような環境の中に建っている。

時には子供達にせがまれて学校周辺の川でアブラハヤやオイカワなどの小魚を釣ったり、野草を摘みながら河原を散歩して押し花帳をつくったりと、遊びながら宿題も片付けるという楽しい自然の学校としての三峰川に親しんでいる。

「三峰川みらい会議」会員募集の新聞記事は、そんな生活の中に飛びこんできた。自分の小学校時代、三峰川はもっと魅力的だった。もっと豊かで、もっと多くの友達や先輩やおじさん達が必ずどこかにいて、いろいろな事を教えてくれた。今の三峰川は寂しすぎる。そんな思いで申し込みのはがきを投函した。

会議に集まった60名をこえる上伊那在住者を中心とした会員の思いは、予定をはるかに上回る数の会議と、予定外の現地を歩く三峰川ウォッチングの積み重ねの中であふれんばかりの勢いで次から次へと出てきた。老若男女、職業もキャリアも異なるボランティアスタッフの話し合いは、毎回学ぶ事が多く、全ての会員がお互いに先生になり生徒になりながら豊かな時間を共有できたという思いは共通であろう。

そんな中で40歳代の私たちが企画・運営の一端を担うことになった事も貴重な体験となった。できあがった計画と、動き始めたプロジェクトが、さらに輪を広げる中で三峰川のみらいを創り出していくことを祈らずにいられない。

得がたい機会を与えてくれた建設省天竜川上流工事事務所の皆さん、伊那市・

高遠町・長谷村、そして三峰川総合開発事務所の皆さんに厚くお礼を申し上げるとともに、今後ともご指導の程お願いいたします。

④　そして今

塩見ケ岳グループ代表者　　丸山　宏一（高遠町）

時、平成９年８月21日の夜、私の人生が少し変化した。「みらい会議」の活動原則について「個人的な参加で地域の代表じゃない」と最後まで唱えていた私が、会議が進み、グループ別会議で意見を出しあって居るうちに、いつの間にか代表者になってしまい、今日に至ってしまいました。メンバーの皆さん、事務局の方々に迷惑をかけてしまうことなぞ夢にも思わなかった。メンバーの三峰川に対する思い出、感慨、未来への夢等々語りあう中で「これはちょっと大変なことになったぞ」と内心思いつつ、回を重ねるごとに積極的な意見、それも私利私欲にとらわれない純粋な意見や思いを事務局さんの好アドバイスと相俟って進められ、現地体験会「三峰川ウォッチング」、いつも高い所から見ていた三峰川も角度を変えてじっくり見ることによって見えて来るもの、今、何をなすべきかが徐々にではあるが見えて来た気がする。又、検討会議の諸先輩方の実体験から語られる重い一言一言に「中途半端は出来ないな」という空気がひしひしと伝わって来たことが思い起こされる。２年時に入り次のステップに進む時、遊び心で「ゴミひろいや、アレチウリ等の一掃をやる人」を募ったところ、大勢のメンバーの賛同を得て名称も『クリーン作戦チーム』サブテーマは「先ず楽しくやること、飲み会を大いにやる、何にでもチャレンジしよう」ということでスタートし、ある時は居酒屋であるときは源流部で、ある時はアレチウリの中で、ある時は会議室で激論を交わし、永遠のテーマ「地球上からゴミをなくそう（出さない）、祖先からの預かり物のこの緑の地球を、そして豊かな川の流れの三峰川を無事に子や孫に引き継ぐこと」の大切さを常に心の中に置き活動して行きたいと思う。何んと言ってもあのやっかいな『アレチウリ』が源流部まで蔓を伸ばさないように。

⑤　三峰川みらい会議に参加して

東駒ケ岳グループ代表者　　矢澤　章一（高遠町）

諏訪湖に流れを発する天竜川には幾つもの支流が流れ込んでいる。

中でも仙丈岳に源流を持つ「三峰川」は、昔から暴れ川として有名だった。そ

んな「三峰川」の流域に生活してきた私には、川は子供の頃からの唯一の遊び場であり70歳を経た今日に至るも数々の思いでの残る場所でもある。

この「三峰川」も時代の流れとともに、「かわぐみ」の茂みのあった川岸の堤防はコンクリート形成物により幾何学模様に変化し、治水、利水、の名の下にダムでせき止められ、「暴れ三峰川」は「あわれ三峰川」となり暴れることを忘れた治安のよい川にかわった。

そして半世紀、平成の今日、子供たちの声の聞こえない川面にはビニール製品が引っかかり、空き缶がころがり、小鳥は鳴き声を忘れ、カラスのみが活動している、こんな状況の中でもう一度「三峰川」を見直そうとして企画された、「三峰川みらい会議」は、“はきだめに立った鶴”を見るごとき感じがした。

一方、時代の流れと言えばそれまでだが、二十世紀の我々が自然界に大変化を与えたまま良きにつけ悪しきにつけ手直しもせずして、二十一世紀に送ることの無責任さに対して、反省と良き手段を見出すべきこの会議の一員に選ばれたことに重圧を感じています。

旧年この会議の初回の時、自ら希望して参画した会員の皆さんのあまりにも多いのに驚いた。今まで自然環境整備やこれに関するシンポジュウム等参加したこともあったが、理想論的発言や形ばかりの意見が多かった。この会議は自分たちが経験したことや、身近な経験に基づく実行可能な意見が多く出されてきたこと、数回にわたる現地見学会等、地に足のついた会議であり、官民一体となって我々の手で新しい二十一世紀に向け三峰川を整備していきたいと言うファイトある発言に満ちている会議であったことを強調したい。

この企画は全国的にも珍しいものと自負するとともに、緻密な会議計画のもと、無駄のない意見集約やまとめに尽力されてきた建設省天竜川上流工事事務所、調査課の皆さんに心から感謝の拍手をお送りします。

⑥　三峰川みらい会議に参加して

東駒ケ岳グループ代表者　　横内　正（伊那市）

「三峰川を生物達の聖域に！」という理想を掲げて会議がスタートした。第１回の会議は60名の大人数だった。川の自然に少なからず興味を持ち、行政に「こうしてほしい。」「川はこうあるべきだ。」という、願いを持つ人達がこんなにいたというのを目の当たりにして、正直驚いた。

しかし、さらに驚いた事がある。それは参加者の意見が実に多様なことだ。私は、「川を生物の聖域にするのなら簡単なことだ。それは管理の手を引いて、ほっておけばいいのだ。」と思っていた。だから、会議ではできるだけありのままを残して行くべきだと主張しようと思っていた。だが、現実には、川をもっと開発して利用していこうとする意見も結構あることがわかった。川はある程度管理しないと危険が常にあることも思い知らされた。理想と現実は違う。「自然との共生」と一言で言うけれど、人間がこれだけ生活している中でそれを真に実現するのは至難の業かもしれないとわかっただけでも、私にとっては意味のある会議であった。

みらい会議の活動は実はこれからが本番である。会議で話し合ったことが絵に描いたもちに終わらぬようにしたい。理想を実現するために会議のメンバーの１人１人ができることを少しずつ積み上げていくしかないと思う。

3）三峰川みらい会議・事務局

①　三峰川みらい会議に参加して

事務局担当者　　田中　政志（駒ケ根市）

私は、「三峰川みらい会議」の発足時点から平成10年３月までの、８ケ月あまりの短い期間ではありましたが、事務局員の１人として参加をさせていただきました。

三峰川と言いましても、私自身、生まれも育ちも駒ケ根市であり、三峰川に何らかの関係を持つと言うことは、子供の頃から考えてもあまりというよりは、ほとんど無かったように思います。このように、三峰川についてほとんど知識のない私が、事務局員の１人として参加していたわけではありますが、振りかえってみますと、みらい会議メンバーの皆さんの支えなくしては、事務局員としての役割は果たせなっかたように思います。

「三峰川みらい会議」が立ち上がる前の準備期間に際しましては、メンバーをどのように募集するのか、会議の名称はどうするのか、いつまでに計画を創り上げなければならないのか、というような、まったくもって事務的な考え方や物の進め方しかしていなかったように思います。「三峰川みらい会議」という名称も、三峰川沿川の市町村に置かせていただいた募集用のチラシも、正直言いますと、その時点ではとにかくいろんな方々の目に付きやすいようにという考えに基づい

ているもので、「みらい」という言葉も、「未来」といった漢字ですと何となく堅いイメージが先に立つのではないか、ですとか、チラシについても文字はなるべく大きくし、色使いも派手にして、所々にイラストを入れてみたりと、とにかく柔らかいイメージで目立つようにということを考えていました。

メンバーを募集しているという内容は、チラシの他にも新聞記事等で紹介してくれたため、地域の皆さんはもとより県内外の幅広い皆さん61名の応募があり、正直言って10名程度の応募しかなかったらどうしようと、一抹の不安に駆られていた私も、その応募者の多さに驚きを感じずにはいられませんでした。また、応募された皆さんのハガキには、三峰川への想いがびっしりと書かれており、この内容を見させていただいて、三峰川に対してこれだけの方々が想いを寄せているんだということに気付き、そして、今まで半ば遊び半分にチラシ等を作っていた自分自身に恥ずかしを感じ、中途半端な気持ちでは事務局員はとても勤まらないと感じました。

そんな中で迎えた、第１回目の「みらい会議」。もちろん応募された61名の皆さんと初めて顔を会わせるわけであり、皆さんそれぞれの三峰川に対する想いもハガキ等で読ませていただいていたため、どの方がどんな意見を持っているのかという期待感と、またその逆に恐怖感のようなものもあったように記憶しています。

私が事務局員として参加したのは、初めて顔を会わせた第１回から第７回までの間でしたが、この会議は回を重ねるごとに人数こそ減少ぎみではありましたが、それに反比例するように三峰川への想いというものは膨らみつづけていたように思います。

三峰川をこよなく愛している皆さんが、三峰川のみらいについて真剣に考え、そして自ら川の中へ入っていきゴミを拾い、アレチウリと闘っている姿というものは、きっと次世代を担っていく人々の目にとまり、いつしかそれが大きな塊となり、力になるのだと思います。

私は今後も行政に携わる人間として勤めていくわけではありますが、この「みらい会議」で知ることのできた、多くの皆さんの地域を守り育てたいという熱い想いと、これが一つの塊になることによってできる大きな力というものを忘れることなく、これからの仕事に取り組んでいきたいと思っています。

②　三峰川みらい会議の舞台裏

事務局担当者　　稲葉　　傑（駒ケ根市）

平成９年８月21日に発足した三峰川みらい会議は、平成11年３月30日の卒業式をもってとりあえず解散することとなりました。あっという間の１年８ケ月でしたが、私にとって、多くの三峰川を愛する人達と知り合いになれたことや、地域のみなさんといろんなことを議論する非常に貴重な機会を与えてくれました。建設省という組織は、出張所の出先機関を除けば地域の方々と直接接する機会が非常に少ないため、これまで地域の方々と接する機会がまったくなかった私にとっては、会議の中で「何を言われるのか、何を批判されるのか」と非常に恐怖感がありました。今でも、第１回目の会議の席で発言された「川は建設省のものではないぞ！」という言葉は深く心に残っています。また、三峰川みらい検討委員会において、他の委員の方々を相手に孤軍奮闘して三峰川将来像計画の素案を熱弁していたみらい会議の代表者の方々の後姿は、非常に頼もしく覚えています。

振り返ってみると、事務局の舞台裏はいつもドタバタが絶えず、会議のやり方や進め方などについて試行錯誤の連続でしたので、特に代表者の方々には大変なご迷惑をおかけしてしまいました。今から考えれば、グループの名称や会員証・みらい通信の発行など、思いつきや遊び感覚で始めたことばかりだったので、メンバーのみなさんを振り廻しご迷惑をおかけしたことを大変申し訳なく思っています。

◇グループに分割

「応募者が61名もいると議論するのが大変だよネ！　やっぱり親密に話し合うためには７～８名程度がいいかなぁ。でもグループ数が多くなると事務局が面倒になるし、三つのグループ程度の方が運営しやすいし…」と考えて三つのグループに分割しました。しかし、検討を進めていく内に、各グループの検討の進捗状況などが刺激となり、各グループが競い合うなど思わぬ効果が現れることとなりました。

◇グループの名称

「普通に名前を付けてもつまらないし…三峰川って何で三つの峰っていうのだろう？　三峰川の源流は仙丈ケ岳だし…とりあえず、由来は分からないけど三峰川の名にちなんで地元の方々に愛されている流域の山の名前を付けようか…」ということで、『仙丈ケ岳』『東駒ケ岳（当初は、駒ケ岳と名付けたのですが、

メンバーの方々より、あの山は駒ケ岳ではなく東駒ケ岳だという意見があり改名しました)』『塩見岳』と名付けました。

◇みらい会議会員証

「会議中に名前がわからないので名札が欲しいなぁ。顔写真があった方が面白いよネ！　グループ別に台紙も変えて、免許証みたいな会員証にしようか。」と作ったのが『会員証』でした。最初は、魚釣りの鑑札などのように会員証に特典を付けたかったのですが、これは実現できませんでした。

◇みらい通信

「会議に出席できなかった方に会議の内容を連絡しなければならないよネ！でも、会議の内容をまとめるのも面倒だし…いっそのこと新聞にしてしまおうか」と『みらい通信』の発行を始めました。本来であれば、行政（お役所）が発行するものですから、内容など非常にきめ細やかなところまで気を付けるのですが、「みらい通信」に限ってはニュースは速報性が１番大切と、上司の確認を得ずに発行していました。

これからも河川行政に携わっていくことになりますが、いつまでも「川はみんなのものであり、建設省はみんなのために川を守り育んでいく（管理)」ことを忘れずにいたいと思います。10年後、三峰川みらい会議をきっかけとして芽生えたいろいろな活動が、地域を巻き込んだ大きな輪となっていることを願うばかりです。きっと、みらい会議メンバーや流域のみなさんの三峰川に対する熱い思いにより実現化していることでしょう。

③　かつての水ガキをわくわくさせた三峰川みらい会議

事務局担当者　　鈴木　信行（岐阜県出身）

今でも夏になると、長良川上流の郡上八幡町の子供たちが、橋の欄干から数メートル下の川の淵に飛び込む姿を見かけます。私は、木曽川に合流する飛騨川の下流で生まれ育ちました。子供の頃の流域には、まだ川に親しみ、川で遊ぶ元気な水ガキ（水で遊ぶガキ）が残っていました。魚釣りや魚すくいの好きな子供たちは、川が気になって気になって仕方がなく、学校が休みの日には何回も川を見に行っては、川と水と魚のことを友達同士でわいわい話し合っていました。プールができるまでは、近所の大人たちが交替で見張ってくれる中、小さな子供も交えて川で泳いでいました。当時の川には、人々の興味を引きだし、関心を高め、

感動を与える魅力がありました。しかし、現在では、長良川上流に残る水ガキは、絶滅の危機に瀕する生き物になってしまいました。私のふるさとの川も、ここ三峰川も、水ガキは既に絶滅してしまったようです。

川に入ることを躊躇させるような水質や、人が水際に近寄れず、生態系を貧弱なものとする護岸構造などは、川の魅力を著しく低下させた大きな要因だと思います。また、学校や地域社会では、川は危険な場所という認識が強くなり、子供たちを川に近寄らせないように指導しているようです。決して意のままにならない川の自然や生き物と向き合うことで、子供たちの感性が磨かれ、想像力が養われていたのに、また、自然と真剣に向き合うことで、生命の尊さ、自然の法則や仕組みを理解することができたのにと思うと、とても残念です。

このように、かつての水ガキは、最近の川と人とのつきあい方に寂しい思いをしてきましたが、三峰川みらい会議に参加して、とてもワクワクさせられました。ここでは、地域の特性を活かした自然環境の復元、多様な生態系の復活、歴史・文化に根ざした美しい景観の形成、河川敷の美化など、独自の魅力を有する三峰川を整備・保全していくために、熱い議論が繰り返されていたからです。

三峰川みらい会議での活動を振り返って、会員の一人の方が述べた感想が忘れられません。それは、「川は水を流すところではない。川は水が流れるところなのだ。これを再認識した」というものです。

④　ちょっぴり嫉妬してしまった三峰川みらい会議

事務局担当者　　藤堂　正樹（東京都出身）

三峰川への熱い想いを語る会議に2年間参加させていただき、自分の子供の頃を思い出してしまいました。私の子供の頃の川とのつきあいは三峰川沿川の皆さんと違って、とても情けないものでした。小学生までの期間、東京の多摩川下流部で過ごした私にとって、川と言えば「黒い、汚い、臭い」の3K状態のものでした。それは最悪でした。川で遊ぶと言っても、水に入ったり、魚取りをするなど到底考えられず、ちょっと広い高水敷で野球をしたり、堤防上をマラソンしたりともっぱら運動場としての記憶しかありません。

少したって、学生時代に山歩きをするようになり、南アルプスに登るために大井川の源流に架かる吊り橋を渡ったとき、「青く、澄んで、滔々と」流れる川を見ました。周囲の断崖の屹立とした美しさと相まった景観に胸を打たれました。

これが私が川の勉強を始め、川の仕事をするようになったきっかけです。因みにその時は聖・赤石岳に登り、最後は隣の小渋川沿いに胸まで浸かりながら下り、伊那大島にでました。小渋川沿いで作ったインスタントラーメンのうまかったこと…。青春の思い出です。

今回、三峰川みらい会議の事務局を担当し、久々に南アルプスの光景を見て懐かしくなりました。そして、会議運営の過程で何よりうらやましかったのが、皆さんの三峰川に対する“想い”の強さでした。特に昔の三峰川を語った回では、参加者全員が自分だけの体験談を披露し、自慢話に花が咲きました。ストーブのせいではなく、部屋が熱かったように感じました。

私がこの仕事に就いたのは「川が好き」だからであり、これを続ける限りはこの気持ちは失いたくないと思っています。

さらに言えば、みらい会議の皆さんは、単に「川」ではなく、「三峰川が好き」と固有名詞で言える方々ばかりです。身近な川をこんなに愛せることは素晴らしいことだし、やっぱりうらやましいことです。私もその端くれに入れてもらったことに感謝しています。

みらい会議のメンバーの皆さん、天竜川上流工事事務所の皆さん、どうもありがとうございました。

⑤　思いは現実に

事務局担当者　　宮下　幸彦（長野県出身）

天竜川の源で生まれた諏訪人の思いは、ちょっと複雑でした。私には、諏訪湖でスケートをした体験はありますが、泳いだ記憶はほとんどありません。三峰川はその点、私と同世代の方でも、泳いだり魚をとったりという体験が生々しく残っていることにまず驚きました。諏訪湖を汚し、天竜川の水を緑色に染めてしまった諏訪の民には、身の置き場がない感じすらしました。だからという訳ではありませんが、メンバーの川への思いの強さには脱帽しましたし、この思いを大切に受け止めて、良い会議にしたいと言う気持ちが、沸々とわき上がったものでした。

みなさんの思いや考えを、ワークショップを通じて形あるものに創りあげていこうと考えた時、若干の不安もありました。運営のこと、事務局の力量のこと、メンバーの立場の違いなどなど…。でも、そんな不安も遊び心を持ったみなさん

のやる気に支えられて、いつの間にか消えていました。そして結果として、みらい会議の主な合意形成は、全員参加のワークショップによって行うことができました。私自身、試行錯誤のなかでとても勉強させていただき、こうした機会に恵まれたことを心から感謝しています。

なによりも嬉しかったのは、メンバーの個々の思いが徐々に大きな塊まりとなっていく様子を目のあたりにできたことです。それはあたかも意志をもった生命体が、栄養を吸収しながら成長していくようでした。

第１回みらい会議で、みなさんが胸の前に掲げた白いボードの言葉はどれも印象的でした。あの言葉に込められた思いこそ、この会議の出発点であり実は帰着点だった様に感じます。あのシンプルな言葉を実現するために、みらい会議は回っていたのではないでしょうか。でも、戻ってきた場所は、前よりも少し高い場所です。らせん階段を上がるように、思いのエネルギーは少しずつ実現への速度を上げているようです。

「思い」はそれをありありと現実であるかのように語ることによって、実現していくのだと思います。そして、「思い」を「行動」に移し始めた現在、みらい計画はほんの少しだけみらい領域へと足を踏み入れたのではないでしょうか。

私の中では、いつしか諏訪人から同じ流域人へと、気持ちの変化が起こっていました。

５．今後の三峰川みらい会議について

自然豊かな三峰川において、治水、自然環境の保全、河川空間の利用の相反する三つの課題をどのようにして調整し、現実のものとしていくのか、地域のみなさんの声を反映しながら次世代に誇れる三峰川のみらい像を探し出すことを目的として「三峰川みらい会議」を設立しました。

三峰川みらい会議は、三峰川のあるべき姿（みらい像）についての検討を行い、住民の声を反映した素案として三峰川みらい検討委員会に提案を行い、次世代に誇れる三峰川をつくり守るための指針となる「三峰川将来像計画」としてとりまとめてきました。また、現在、みらい会議は、計画の検討を行う組織から、計画を実現するための活動組織への転換を目指して、自らが企画立案した活動を自主的に展開しており、三峰川の豊かな自然環境を知るための三峰川ウォッチングや三峰川上流探検隊、子供たちが三峰川で遊ぶための教本となるハンドブックの作成、流域全体でアレチウリ（帰化植物）撲滅作戦や河川清掃、治水の歴史を残すための災害経験者の記録作成など、様々な活動を実施しています。

「三峰川のあす・みらいを探しませんか」と地域のみなさんから公募により設立した三峰川みらい会議は、当初の計画とおりに平成11年３月30日に開催される修了式をもって約２年間の活動に終止符を打つことになります。今後は、この「三峰川みらい会議」をひとつの契機として、各々がみらい会議での経験や体験を生かして、次世代に誇れる三峰川の実現に向けて、「三峰川みらい会議」を母体とした新たな参加者を募った住民主体のグループが組織され、地域のみなさんと行政が連携した継続性のある活動が展開されるように望まれます。

■**三峰川みらい会議・メンバー名簿**（敬称略）　◎はグループリーダー

仙丈ケ岳グループ

若林　徹男	松井　君子	下島　宏文	平出　利男
◎白鳥　　孝	小田原光計	白鳥　博文	北原　　武
木嶋　幹勇	◎高島　良幸	伊藤　幸宏	中川　　泰
吉沢　政己	南坂　丈治	宮入賢一郎	鈴木　　孝
二宮　孝治	御子柴慶治	藤木　　満	中山　俊幸

東駒ケ岳グループ

河村　優子	上島　久人	越　　洋子	春日　良郎
黒河内　俊	伊藤　明生	稲辺謙次郎	大瀬木恵一
井出　　靖	高澤　　勝	成田　郁美	斉藤　喜啓
板山　高夫	吉沢　正徳	前林　賢一	黒河内浩人
◎横内　　正	坪木　澄人	藤沢　陽一	◎矢澤　章一

塩見岳グループ

堀込　秀樹	中山千万樹	織井　秀夫	◎木下　茂人
若林　　仁	吉田　保晴	山浦　健康	山田　幸好
奥田　隆利	井口　秀賢	若林　敏明	小川　文昭
蟹沢　勝博	堀内　照夫	小椋　初夫	中村　晴一
埋橋　良和	北原　信吾	◎丸山　宏一	林　　光憲
堀井美代子			

■**三峰川みらい検討委員会・委員名簿**（敬称略）

鈴木　徳行	土田　勝義	春日　英男	北城　節雄
武田　　登	平澤　郁夫	柿木　憲二	小市　正英
半田　榮範	小坂　樫男	北原　三平	宮下　市蔵
有賀　信夫	登内　英夫	春日　太郎	橋爪　将司
田畑　正道	北原　勝美	池上　直樹	熊谷　千秋
白鳥　　孝	高島　良幸	横内　　正	矢澤　章一
木下　茂人	丸山　宏一	武井　孝博	浦野　　守
野田　　徹	田村　秀夫	加本　　実	浦上　将人

■三峰川みらい会議事務局

天竜川上流工事事務所

萩村　治夫　　北澤　利実　　稲葉　　傑　　田中　政志

柴田　周二　　北村　　篤　　古瀬　友紀

三峰川総合開発工事事務所

高木　守夫　　杉山　　勉

パシフィックコンサルタンツ㈱

高木　茂知　　藤堂　正樹　　鈴木　信行　　宮下　幸彦

植村　　正　　中川　伸司　　本多　信二　　渡辺　治久

坂本　宏美

みんなの三峰川を次世代に

平成11年３月19日　発行

企　画　建設省中部地方建設局　長野県駒ケ根市上穂南７－10
発　行　天竜川上流工事事務所調査課　〒399-4114　☎　0265－81－6415

著　者　三峰川みらい会議事務局　天竜川上流工事事務所　調査課
〒399-4114　☎　0265－81－6415

編　集　㈱環境アセスメントセンター　本　　社　静岡県静岡市清閑町13－12
〒420-0047　☎　054－255－3650
松本研究室　長野県松本市島立439－２
〒390-0852　☎　0263－47－6644

印　刷　双　葉　印　刷　㈲　長野県松本市城東２－２－６
〒390-0807　☎　0263－32－2263

「語りつぐ天竜川」の発刊にあたって

南アルプス、中央アルプスの高峰にはさまれて、伊那谷を北から南へ貫流する天竜川。その流域では、あり余るほどの自然の恩恵に浴して、人々は豊かな暮しを育んでいます。しかし、名にし負う〝暴れ天竜〟は、ひとたび豪雨が見舞えば日々の穏やかな表情を一変し、猛々しい牙をむき、人々の暮しを脅かしてきました。

天竜川上流工事事務所では、天竜川が〝母なる川〟として優しい微笑をたたえ続けて欲しいと願う地域の人々の切なる気持ちに応えるため、半世紀にわたり、地域の人々の多大なご協力のもと自然の脅威と闘いながら河川改修事業や砂防事業に取り組んできました。しかし、まだまだ危険な箇所は多く残されており、絶えず流域の変貌をみつめ、河川管理施設の整備と維持管理を図っていかなければなりません。

我が国のように、急峻な地形、厳しい自然条件のもとで限られた河川の氾濫原で高密度な社会経済活動を展開していくにあたっては安全な川づくりが不可欠であり、河川にどうしても人間の手を加えざるを得ません。一方、河川は、**地域の風土と文化**を形成する重要な要素であり、また豊かな生物が育まれる場所であり、かつ、それは長い歴史の中で様々な過程を経ながら形づくられてきたのです。このため、安全であるとともに地域の個性を生かした、自然豊かな川づくりを進めるにあたっては、まず、河川、そして、河川をつくりあげてきた地域そのものの成り立ち、歴史等をよく学んでいかなくてはならないと思います。

「語りつぐ天竜川」は、こうした考え方に立ち、天竜川に関する地域の知見や経験を収集し、広く地域共有の知識とすることにより、地域の方々に天竜川に対する認識を深めていただき、よりよい天竜川を築いていくことに役立てたいと思い発刊するものです。昭和61年度の初版を発刊してから早12年を迎え、今回発刊する２巻を合わせて50巻になります。これも偏に天竜川を愛する地域の方々、その気持ちに応えようとお忙しい中ご協力頂いた執筆者の方々の賜物です。

なお、ご執筆頂いた方々には、自由な立場からお考えを披瀝していただいていますので、建設省の見解とは異なる場合がありますことを付言します。

建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所
所長　田　村　秀　夫

「語りつぐ天竜川」目録

1. 伊那谷の気象　米山啓一著
2. 天竜川上流域の立地と災害　北澤秋司著
3. 天竜川に於ける河川計画の歩み　鈴木徳行著
4. 総合治水の思想　上條宏之著
5. 総合治水と森林と　中野秀章著
6. 伊久間地先に於ける天竜川の変遷　松澤　武著
7. 天竜峡で見た天竜川水位の変遷　今村真直著
8. 村境は不思議だ　平沢清人著
9. 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷　倉沢秀夫著
10. 諏訪湖の御神渡り　米山啓一著
11. 理兵衛堤防　下平元護著
12. 近世　天竜川の治水　―伊那郡松島村―　市川脩三著
13. 川筋の変遷　―天竜川と三峰川の場合―　唐沢和雄著
14. 伊那谷山岳部の降雨特性　宮崎敏孝著
15. 天竜川の橋　日下部新一著
16. 伊東伝兵衛と伝兵衛五井　北原優美編
17. 天竜川の魚や虫たち　橋爪寿門著
18. 天竜川のホタル　勝野重美著
19. 天竜川流域の村々　松澤　武著
20. 小渋川水系に生きる　―人と水と土と木と―　中村寿人著
21. ものがたり　理兵衛堤防　森岡忠一著
22. 量地指南に見る　江戸時代中期の測量術　吉澤孝和著
23. 土木技術と生物工学　―生きものを扱う技術―　亀山　章著
24. 戦国時代の天竜川　笹本正治著
25. 天竜川の水運　日下部新一著
26. 惣兵衛川除　市村咸人著
27. 紙芝居　開墾堤防　―下伊那郡豊丘村伴野―　竹村浪の人著
28. 昭和36年伊那谷大水害の気象　奥田　穣著
29. 天竜川の淵伝説　―『熊谷家伝記』を中心に―　笹本正治著
30. 天竜川の源流地帯　赤羽　篤著

31. 東 天 竜　　三浦孝美・仁科英明 共著

32. 天竜河原の開発と石川除　　塩沢仁治 著

33. 伊那谷は生きている　　松島信幸 著

34. 天竜川の災害伝説　　笹本正治 著

35. 天竜川の災害年表　　笹本正治 編

36. 天竜川水運と榑木　　村瀬典章 著

37. 水辺の環境を守る　　桜井善雄 著

38. 諏訪湖　― 氾濫の社会史 ―　　北原優美 著

39. 河川工作物と魚類の生活　　中村一雄 著

40. 天竜川上流域の過疎問題　　山口通之 著

41. 資料が語る　天竜川大久保番所　　松村義也 著

42. 天竜川上流　河辺の植物と植生　　関岡裕明 著

43. 水利開発にみる中世諏訪の信仰と治水　　藤森　明 著

44. 横川山巡覧記　―『辰野町資料第87号』より ―　　辰野町教育委員会編・赤羽　篤 校訂

45. 天龍川の鳥たち　　福与佐智子 著

46. 遠山川流域の民俗とふるさとイメージの創造　　浮葉正親 著

47. 田切ものがたり　　赤羽　篤 著

48. カエルと暮して　　山内祥子 著

（以上既刊）

49. 伊那の冬の風物詩　ざざ虫　　牧田　豊 著

50. みんなの三峰川を次世代に　　三峰川みらい会議 事務局 編

（発刊中）